令和4年度大学教育再生戦略推進費
「大学の世界展開力強化事業」 計画調書
～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～

[基本情報]　（主な交流先：英国・インド・オーストラリア）

1.	大学名（○が代表申請大学）	東京藝術大学
2.	機関番号	代表申請大学　12606
3.	主たる交流先の相手国	英国・インド・オーストラリア
4.	事業者（大学の設置者）	ふりがな　ひびの　かつひこ （氏名）　日比野　克彦　（所属・職名）東京藝術大学・学長
5.	申請者（大学の学長）	ふりがな　ひびの　かつひこ （氏名）　日比野　克彦
6.	事業責任者	ふりがな　いまむら　ゆうさく （氏名）　今村　有策　（所属・職名）美術研究科・教授
7.	事業名	【和文】 Shared Campus（国際共創キャンパス）を活用した日英豪印 SDGs x ARTs グローバルリーダー養成プログラム－世界を幸福にするイノベーション創出－ 【英文】 Japan-UK-Australia-India SDGs x ARTs Global Leadership Initiative collaborated with Shared Campus (International Co-Creation Campus) -Creating innovations for world happiness-
8.	取組学部・研究科等名（必要に応じ[ ]書きで課程区分を記入。複数の部局で合わせて取組を形成する場合は、全ての部局名を記入。大学全体の場合は全学と記入の上[ ]書きで全ての部局名を記入。）	学問分野：◉人社系 ○理工系 ○農学系 ○医歯薬系 ○看護・医療系 ○全学 ○その他 実施対象（学部・大学院）：○学部 ○大学院 ◉学部及び大学院 大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻 大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻

9. 海外相手大学

	国名	大学名（日本語）	大学名（英語）	部局名
1	イギリス	ロンドン芸術大学	University of the Arts London	セントラル・セント・マーチンズ校
2	インド	ナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン（NID）	National Institute of Design	産業デザイン学部
3	オーストラリア	モナッシュ大学	Monash University	芸術・デザイン・建築学部
4				
5				
6				
7				
8				

10. 連携して事業を行う機関（国内連携大学等）

	大学等名	取組学部・研究科等名		大学等名	取組学部・研究科等名
1			4		
2			5		
3			6		

11.「学校教育法施行規則」第172条の2第1項において「公表するものとする」とされた教育研究活動等の状況について、公表しているHPのURL
http://www.geidai.ac.jp/information/info_public/education_announce （東京藝術大学公式Webサイト　HOME ＞ 広報・大学情報 ＞ 情報公開 ＞ 教育情報の公開）

12. 本事業経費

（単位：千円）※千円未満は切り捨て

年度		2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合　計
事業規模（総事業費）		**21,610**	**21,260**	**21,260**	**21,240**	**20,982**	**106,352**
内訳	補助金申請額	20,000	18,000	16,200	14,580	13,122	**81,902**
	大学負担額	1,610	3,260	5,060	6,660	7,860	**24,450**

13. 本事業事務総括者部課の連絡先

部課名			所在地	
責任者	ふりがな （氏名）		（所属・職名）	
担当者	ふりがな （氏名）		（所属・職名）	
	電話番号		緊急連絡先	
	e-mail（主）		e-mail（副）	

質の保証を伴った交流プログラムの目的と内容【1ページ以内】

①　交流プログラムの目的・概要等

【交流プログラムの目的及び概要等】

2022年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻は、世界中に大きな衝撃を与え、紛争によって食糧・エネルギー・環境問題などにも影響を及ぼし始めている。これらは**人類と地球の生存の観点に立った持続可能な活動**が、**世界の最優先課題**であることを再認識する契機となり、SDGsに掲げる目標の真の実現を改めて考え直す局面にいる。

こうした地球規模の課題について、**芸術が秘める産業・経済界へのイノベーション創出の可能性**に加え、**文化的な調和ある共存**に根差し、民族・性差・障がい・経済格差等がもたらす**「心の国境線」が取り払われた世界の平和構築や連帯**を目指すことは、21世紀の芸術大学がより一層果たすべき役割である。

本事業では、上述の背景を受け、現代世界が直面する持続可能な社会への課題に芸術から寄与する**「SDGs x ARTs」**をテーマに、日英豪印の芸術教育を牽引する大学と連携し、**「持続可能な社会づくりに取り組む国際協働による芸術教育・研究プログラム」の構築**と**「社会と芸術をつなぐグローバルリーダーの養成」**を目的とする。本学では昨年度にSDGs推進室を設置し、**芸術が持つ「普遍性」とSDGsの「持続可能性」を根底の部分で合致**させ、**「世界を幸福にするイノベーション創出」**に向けた活動を開始しており、本プログラムはこの活動とも密接に連携して計画・実施される。加えて本学が取り組んできた「TURN」、「とびらプロジェクト」、「DOOR」等のダイバーシティ・社会実践プロジェクトとの連携も図る。

具体的な教育活動としては、本学では大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻（通称：GAP）と国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻（通称：GA）の２専攻にて、**国際分野における理論と芸術実践を横断する複合的な研究**を行っており、ロンドン芸術大学（英国）、モナッシュ大学（オーストラリア）、National Institute of Design（インド）と連携したプロジェクトを実施する。**英豪印各地の連携大学のローカルの現代社会の課題に取り組むインターローカルな社会実践（ソーシャルプラクティス）プロジェクトを活動単位として**、連携大学と国際交流協定を結び、交換留学の派遣・受入を促進しながら、**国際的な連携に基づく修士・博士におけるダブルディグリーを目指す。**

加えて、プロジェクトにおいては、**芸術系大学間の新たな国際交流スキームである「Shared Campus（国際共創キャンパス）」に参画**しながら、本学教職員・学生ユニットの派遣と連携大学の教職員・学生の受け入れによる双方向の授業を実施する。Shared Campusでは、**各大学のキャンパスを物理的またオンライン上でも相互にシェアしながら、新たな価値創造を目指す「共創」の概念を背景としている。**学際的な協働をその考え方の基盤とし、今日の世界的課題の解決に向けて**（１）社会変革、（２）ポップカルチャー、（３）重要な生態学（気候変動・科学技術との連携）、（４）文化・歴史・未来、（５）教育ツール**の５つのテーマに分かれて分野別に共同研究を進めているため、本事業と親和性が高く、相乗効果が見込めるところである。

また、SDGsは分野に限った課題ではなく社会のすべてのステイクホルダーが取り組む課題であり、本プログラムは音楽・美術・映像すべての学生に向けたプログラムであることはもとより、**大学連携にとどまらず広く行政や企業とも連携を行うものとして、上記に加えて各大学が持つネットワークを基に、インターンシップや地域芸術祭への参加も目指す**。

〇主なプログラム計画

サマープログラム（３週間程度）

1）セッション1―オンライン・自国内学習フェイズ（１週間、JV-Campusの活用）

2）セッション2―インパーソン・オンサイト学習フェイズ―1（１週間-10日、日本での開催）

3）セッション3―インパーソン・オンサイト学習フェイズ―2（１週間-10日、実際の渡航を伴う）

セメスタープログラム（３ヶ月程度）

1）リサーチ・フェイズ（２週間）

2）インターン・フェイズ（２ヶ月、実際の渡航を伴う）

3）リフレクション＋シェアリング・フェイズ（３週間）

【養成する人材像】

芸術が持つ「普遍性」とSDGsの「持続可能性」を根底の部分で合致させ、「世界を幸福にするイノベーション創出」をする、以下の２つの視点をもった人材輩出を最終目標とする。

①大学と社会との協働により、イノベーションの創出など新たな価値創造を目指す人材を輩出すること

②芸術を通じてSDGsが推進する、国際的な課題への解決に貢献する人材を育成すること

具体的には、以下の能力の取得を通じて人材の養成を目指す。

1.自国の芸術文化に係る深い造詣と高い専門技能

2.他国の芸術文化を真に理解する力

3.自国の芸術文化を国際的に発信する力

4.自国および他国の芸術文化に係る専門技能・知識を活かした社会実践力

5.上記の能力修得および社会実践を円滑に行う為の語学力

【本事業で計画している交流学生数】各年度の派遣及び受入合計人数（交流期間、単位の取得の有無は問わない）

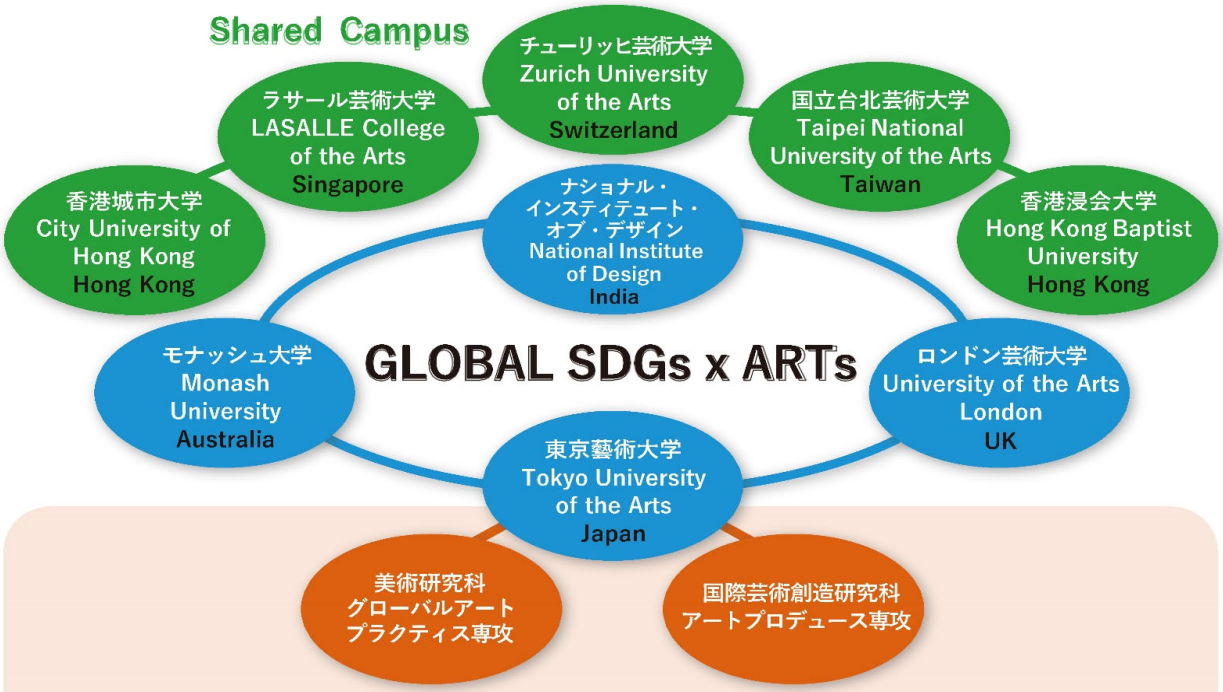
（単位：人）

2022年度		2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
2	6	10	21	10	21	10	21	10	21

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：英国・インド・オーストラリア　）

② 事業の概念図 【1ページ以内】

Shared Campus（国際共創キャンパス）を活用した 日英豪印 SDGs x ARTs グローバルリーダー養成プログラム —世界を幸福にするイノベーション創出—



【東京藝術大学が有する社会連携事業】

SDGs 推進	ダイバーシティ	社会福祉	地域連携•産業連携
藝大 SDGs	TURN		

「SDGs x ARTs」の取組理論と実践を集中的に学ぶサマープログラム	1) SDGs の概念、理論的理解、芸術を通した社会へのアプローチを学習 2) 日本に蓄積された人間と環境の関係を芸術面から実地学習 日本のアート・デザインの環境への取組から現代的課題を学習 3) 連携大学教員による特別講義・ワークショップを介し、平和や環境問題、SDGs 状況を理解。ローカルとグローバルの視座、多角的視野を習得
実践を通して「SDGs x ARTs」を学ぶセメスタープログラム	1) リサーチフェイズ：連携校教員の指導のもとリサーチ対象、目標を決定 2) インターンフェイズ：工房、行政、企業にてインターンを実施 3) リアクション＋シェアリング・フェイズ： インターンでの学びを報告書または作品制作にて発表。学生間で討議

SDGs x ARTs グローバルリーダー

①大学と社会との協働により、イノベーションの創出など新たな価値創造を目指す人材
②芸術を通じて SDGs が推進する、国際的な課題への解決に貢献する人材

（大学名： 東京芸術大学 ）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア ）

③　国内大学等の連携図　【1ページ以内】

（芸術系大学との連携）
　本申請は本学単独によるものだが、**以下の取組や国内外大学との連携枠組み構築を通じ、本プロジェクトの成果を広く共有する。**Shared Campusのテーマパートナーである**京都精華大学**とはShared Campusのネットワークを通して連携を図る。また特に**東京大学大学院新領域創成科学研究科サステイナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム**（GPSS-GLI）（https://www.sustainability.k.u-tokyo.ac.jp/）との連携や、新たに推進室を開設して国際化を積極的に推進する**多摩美術大学**とも連携を検討する。

（芸術系以外の大学との連携）
　本学の社会福祉連携事業である、Diversity on the Arts Project （通称：DOOR）では**芸術系以外の大学**（植草学園大学、関東学院大学、 京都大学、東京大学、東京工業大学、松山大学、横浜国立大学、早稲田大学の8大学）との連携実績がある。連携事業では**多種多様なマイノリティ当事者をゲスト講師として招聘し、連携プログラムを実施した**。受講生との対話を重視した進行により、**様々なダイバーシティ（多様性）への気づきや創造性への理解を深め、その背景に福祉があることを体験的に理解する場を提供している。**今後、これらの活動を通じた、**社会福祉分野の産業界への新たなイノベーション創出の可能性に加えて、国内大学への成果普及が見込まれる**。
https://door.geidai.ac.jp/doortodoor/

（その他、本学が加盟する主な国内大学の連携）
国公立５芸術大学連携ネットワーク
芸術系大学コンソーシアム （https://j-u-c-a.org/）
国連大学SDG大学連携プラットフォーム（SDG-UP）
https://ias.unu.edu/jp/news/news/inaugural-sdg-up-workshop-brings-together-member-universities-from-across-japan.html

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

④-1　交流プログラムの内容　【3ページ以内】

【実績・準備状況】

本プログラムの中心となる大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻および国際芸術創造科アートプロデュース専攻は2016 年の設置以来、世界最高峰の教員陣のもと、世界最高峰の大学や世界を代表するアートプロフェッショナルと国際連携・協働プログラムを展開し、グローバルに活躍するトップアーティスト、キュレーター*、アートマネジメントの育成に尽力してきた。とりわけ世界に伍する教育体制を構築すべく、最先端の芸術教育を行っている世界各国の教育機関との連携強化を推進しており、特にロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校とは毎年共同カリキュラムを開催しており、6年間の実績をもとに次なるより広範な教育研究活動の連携に取り組んでいる。また同時にオンライン教育プログラムの開発や、国際共同授業の開催のメソッド、カリキュラムの開発にも取り組んでいる。

*キュレーター　美術館・博物館の学芸員のうち、主に企画・展示の分野を担う人材

［大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻（通称：GAP）］

グローバルアートプラクティス専攻は2016年4月に設置以来、世界最高峰の美術系大学と本専攻の教員と学生がユニットを構成して共同カリキュラムの授業を実施し、日本と相手国においてセメスター単位の実技授業を開講。授業は原則として英語で行っており、英語論文による修士・博士後期課程の学位取得コースが整備されている。具体的には作品制作を基本にしつつ従来の考え方を超え、論理的な裏付けのもと、いわゆる現代アートの領域についてグローバルな枠組みで、実践的な作品制作を行っている。

これまで、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校（CSM）、パリ国立高等美術学校（BAP）と実施しており、年間を通じて、海外渡航を伴う実地型の教育研究活動を行い、それぞれのテーマのもとで講義、リサーチ、ワークショップ、制作、発表等を行っている。これらは、必修科目「アート・プラクティス」として5単位が付与され、専攻設置以来、60名以上の学生が受講している。

［国際芸術創造研究科（通称：GA）］

大学院国際芸術創造研究科は2016年4月に設置され、市民プロジェクト・企業メセナ・美術館運営等の実践経験のある教員と批評研究・文化行政などの人文社会学系の教員が教鞭をとり、アートマネジメント・キュレーション・リサーチの3分野によりアートマネジメント人材の育成を行っている。

各種の国際交流活動については、必修科目「アートプロデュース総合実習」や選択科目「アートプロデュース演習」などを通じて単位認定しているほか、学位論文提出の際に「特定課題研究報告書」としてカリキュラム上も実践活動を教育研究活動として認めるように整備されている。

SDGsに関連する直近の活動では、2022年4月に特別企画「Masking/Unmasking Death 死をマスクする／仮面を剥がす」展を開催し、ここでは、2021年2月にクーデターが勃発し、いまも紛争による混乱が続くミャンマーの状況を題材に、犠牲となったミャンマー市民の顔をかたどった「マスク」などの展示を行った。また、会期中にはワークショップに加えて、ウクライナ情勢をテーマに学生や一般参加者を対象にゼミ形式のトークイベントを開催し、芸術と平和をテーマに理解を深めることができた。

［Shared Campus］

国際的な教育フォーマットと研究ネットワークのための連携プラットフォームであり、ヨーロッパとアジアの芸術大学によって発足。Shared Campusでは、国境を超えた教育活動と研究活動を大学間で連携し、展開・提供することによって、学生、学部、研究者間のネットワーク構築に大きなメリットをもたらすことを目的とする。プラットフォーム内では、学生のモビリティ向上のため、芸術大学のための新たな効果測定システムである「REBEL（Recognition of Experience Based Education and Learning）」の開発や、単位互換システムである「Coin」の開発も行われている。現在、メインで参加している大学はロンドン芸術大学・チューリッヒ芸術大学・ラ・サール芸術大学・中国美術学院・国立台北芸術大学・香港浸会大学・香港城市大学であり、このうち前5校については、本学でも大学間交流協定を締結しており、ロンドン芸術大学は本事業での連携校となる。ここで進められている事業計画は、ユネスコの「持続可能な開発のための教育」（Education for Sustainable Development）の内容を踏まえることを前提としており、ある一定の大学グループの考え方をまとめることに固執せず、世界共通の指針となるプラットフォーム形成を目指していることが大きな特徴である。

日本からはテーマ・パートナーとして、京都精華大学も参加しており、これらの大学への本事業への成果還元も見込まれる。

［学内の国際化］

2014年度よりSGU事業に採択され、同年11月に大学事務局に「国際企画課」を新設、同年12月には「グローバルサポートセンター」を創設し、上記のグローバルアートプラクティス専攻・アートプロデュース専攻とともに、学内のグローバル戦略を推進し、2017年度の本学創立130周年を機に策定した「東京藝術大学NEXT 10 Vision」に沿って、学長のリーダーシップの下、革新性・国際性・多様性のある取組を行っている。

また、本学は大学の世界展開力強化事業についても、平成27年度「トルコ」、平成28年度「キャンパスアジア」「ASEAN」、平成30年度「アメリカ」、令和3年度「アジア」の5事業の採択経験があり、国際交流事業について多くのネットワークとノウハウを蓄積している。

大学間協定は令和4年5月1日現在で世界28か国／地域・78大学／機関と締結し、そのうち3校とダブル・ディグリー協定を締結している。セメスター単位の交換留学については、コロナ渦前の状況で美術学部や映像研究科などを合わせて、派遣約30名・受入約40名の規模で実施している。

［学内のSDGs推進］
2021年6月にSDGs推進室を設置、あわせて「東京藝術大学SDGsビジョン」を策定し、SDGsの達成に貢献するための取組みを推進している。この取り組みでは芸術が持つ「普遍性」と、SDGsが掲げる「持続性」とを、それぞれの根底の部分で合致させ、学生や社会に向けて、いかに「世界を幸福にするイノベーション」としての役割を果たすかを目的としている。
また、これらの前身として、「アート×福祉」をテーマに「多様な人々が共生できる社会」を支える人材を育成する「Diversity on the Arts Project （通称：DOOR）」プロジェクトや、障がいの有無・世代・性・国籍・住環境などの背景や、習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を表現として生み出す「TURN」プロジェクトを展開し、現在も継続している。

【計画内容】
協働するロンドン芸術大学（UAL,英）、ナショナル・インスティトュート・オブ・デザイン（NID,印）、モナッシュ大学（MONASH,豪）は芸術とクリエイティビティから環境問題に取り組むカリキュラム開発にすでに着手しており、特にUALとNIDは「クリエイティブと環境」の国際共同カリキュラムの開発にも取り組んでいる。また本校が日本で唯一全学でフルパートナーとして参画する国際的な芸術大学連携プラットフォームであるShared Campusでも「Critical Ecologies（臨界のエコロジー）」というテーマで芸術からの環境問題、気候変動問題に取り組む共同プログラムを開発、実施し、国際ダブルディグリーに向けても取り組みを開始している。本プログラムは、これら英豪印の大学、Shared Campusなどの先行する取り組みと緊密に連携して構築し、日本初の「SDGs x ARTs」の国際カリキュラム開発を行う。プログラムはサマープログラムとセメスタープログラムの２プログラムを実施し、サマープログラムではオンラインを通じて多くの学生の参加を受入、かつセメスタープログラムでは日本でのインターンを積極的に活用し、制作における実践、企業の社会貢献活動、地方芸術祭への参加を通して実践を学ぶ機会を提供する。
グローバルアートプラクティス専攻とアートプロデュース専攻の相互の特性を活かした、「リサーチ・ベースド・アート（Research based Art）」を実施し、高度な教育研究の実践の場とする。

●サマープログラム（３週間程度）
短期集中コースは、講義とワークショップで構成され、「SDGs x ARTs」の取り組みを理論と実践両面からのアプローチにより集中的に学ぶ機会を提供するものである。連携校によるオンライン教育と連携校への渡航を伴う実地リサーチを組み合わせることで、参加学生はグローバルな視座からSDGsの取り組みの課題、可能性、そして成功例を学び、社会への貢献の方向性を学習することを目標とする。

1）セッション1ーオンライン・自国内学習フェイズ（１週間、JV-Campusの活用）
各参加学生は所属大学教員の指示のもと、自国内での講義出席の他、本事業に向け構築するオンラインアーカイブシステムを活用した事前学習を実施する。SDGsの概念、理論的な理解、芸術を通した社会へのアプローチを学ぶ。事業開始２年目以降は、本事業で実施された講義やワークショップ等のデータを日英両言語にて両大学が閲覧可能にすることで、アーカイブシステムを質・量ともにアップデートし、参加学生の要望に合わせたオンライン・オンデマンドの授業を提供する。本フェーズは学士の履修も可能とし、広く環境問題へのリテラシーを高め、社会課題に取り組む芸術文化の学習への導入とする。

2）セッション2ーインパーソン・オンサイト学習フェイズー1（１週間ー10日、日本での開催）
連携校学生が最初に日本に集まり、日本に蓄積された人間と環境の関係を学ぶことから実地教育をスタートする。SDGsを単に現代的な課題と捉えず、人類の叡智のなかから、特に芸術との関わりの中から学ぶことを出発点とする。特に本学に蓄積された伝統的な技法による芸術は、人間と自然の関係を学ぶ貴重なアーカイブでもあり、日本の伝統文化を端緒に、人間と自然、環境の関係を学ぶ機会を提供する。これは本学そして日本の国際的なプレゼンスを高めることにもなると考える。同時に現代的な課題に取り組み、国際的にも注目される日本のアート、デザインの環境への取り組みを通して、現代的な課題を学ぶ機会を提供する。

3）セッション3ーインパーソン・オンサイト学習フェイズー2（１週間ー10日、実際の渡航を伴う）
連携校へ渡航し、連携大学教員陣による特別講義やワークショップを集中的に実施する。渡航前には相手大学教員陣とWeb会議を実施し渡航に備え、連携校学生の帰国に伴い英国、豪州、インドへ順次渡航し、世界各地の環境問題やSDGsの状況を理解し、ローカルとグローバル両面の視座から課題に取り組む。国内の学習では得ることのできない取組を多角的に習得する機会を提供する。

●セメスタープログラム（３ヶ月程度）
グローバルアートプラクティス専攻およびアートプロデュース専攻学生と連携校からの学生を中心に、日本においてインターンプログラムとオンラインと対面を組み合わせた授業を実施する。学生は自らの関心や課題に基づく学びの目標を設定し、連携校の教員陣による指導を仰ぎながら学習に取り組む。セメスタープログラムにおいては本学が積極的に推進する「SDGs x ARTs」の取り組みのために設置されたSDGs 推進室と連携し、制作実践、企業の社会貢献活動、地方芸術祭への参加など、実践を通して「SDGs x ARTs」を学ぶ機会を提供する。

■１．リサーチ・フェイズ（２週間）
　サマープログラムの経験を基に連携校の教員の指導を受けながら、**自らの関心、課題に基づいてリサーチの対象、目標を明確化**する。

■2．インターン・フェイズ（２ヶ月、実際の渡航を伴う）
　SDGs推進室と連携し、各学生の課題に関連した大学内の機関、アトリエ、行政、企業などで実践を学ぶインターンを行う。２週間に一回、教員によるヒアリング、チュートリアルを行う。
英国からの来日はEU離脱後の新たな国際教育連携プログラムである「TURING SCHEME」に基づく交流とする。

■３　リフレクション＋シェアリング・フェイズ（３週間）
　約２週間でインターンでの学びの成果を、リサーチ報告書あるいは作品制作に還元し、それを学生主導のサミットや共同シンポジウムで発表を行い、学生間で討議を行う。
リサーチのまとめ、作品制作においては、教員によるチュートリアルを経て完成させる。毎週実施する定例のWeb中間グループレビューには、原則全参加教員および学生が出席し、制作の進捗状況報告とともに、学生が持ち回りで作品に関するプレゼンテーションを行うことで、制作の手法を多角的に学ぶとともに刺激を受け合いながら作品を完成させる。
　学生によるサミットには**大学の教員・学生に加え、産業界からのゲストを招へい**することで、**専門性の高いフィードバックを受ける機会を提供**し、またオンラインで成果をアーカイブすることによって、異文化圏のプレイヤーが受けた印象や、改善のアイディア等を知ることで、よりグローバルな視点での制作活動についてインスピレーションを受ける機会とする。

［レクチャー・プログラム（学部生向け・オンライン）］
　本事業の成果の学内還元の一つとして、**SDGs推進に関するレクチャーをオンラインにて配信**し、**渡航プログラムに参加できない学生や、準備段階の学生に向けた知識教授**を行う。また、コンテンツとしてある程度のアーカイブが出来た状況で、**JV-Campusでの授業科目としても配信**する。

［コロナウイルス感染症の対策］
　コロナ禍において、海外渡航ができない関係上、**オンラインによる授業開発を進め、インターネットを通じて各国との合同授業やワークショップを開催。隔離期間中も心のケアを含めた綿密な連携はもとより、滞在先ホテルの室内で学修できる課題を提供するなどの教材開発**が進んでいる。
　グローバルアートプラクティス専攻では、**取手校地の広範な敷地を活かし野外での対面授業を実施**したり、単にオンラインソフトを使用するだけでなく、**「シンクロニック・シアター」と呼ぶ複数箇所の場所を結んでワークショップ、実技指導が可能となるシステムを開発。グローバルアートジョイントカリキュラムにおいて、ロンドン、パリ、取手に同じ仕様のスタジオを設置**し、**３都市の学生たちがお互いの行動を見ながら応答できるシステムを構築**している。
　アートプロデュース専攻では**各国内の芸術祭をそれぞれ調査し研究発表するオンライン型のリサーチ・ベースド・アートを展開**しており、コロナウイルス感染症の再拡大による渡航制限があったとしても、代替教育手法の準備が整っている。
　また、本学の学生・教職員の海外渡航については、「東京藝術大学における新型コロナウィルス感染症（COVID－19）対応指針」によって定めており、外務省感染症危険情報レベルに応じた警戒区分を発し、状況に応じた対応にあたっている。

［インターンシップについて］
　英国「TURING SCHEME」について、ロンドン芸術大学においては、アートマネジメント人材の育成コースが活発な活動をしており、国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻において参画している、各種の芸術祭や市民プロジェクトなどを通じて、インターンシップ活動を提供する予定である。
　オーストラリア「NEW COLOMBO PLAN」について、モナッシュ大学ではデザイン・建築系の学生が多いため、美術研究科グローバルアートプラクティス専攻を始め、美術学部内のデザイン・建築系の教員の紹介をもとに、各産業へのインターンシップを提供する予定である。
　また、上記以外にも各種工房や東京都美術館との連携事業である「とびらプロジェクト」などの参加も視野に入れる。

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

④-2　学生主体の国際交流プログラム　【1ページ以内】

【実績・準備状況】

本学では**「SDGs推進室」を開設**し、積極的に**学内のSDGsの周知、活動の推進**に取り組んでいる。この活動を通して学生間の環境問題への関心を促進している。

芸術を通じて**社会的転換点を創出するプログラムである「TURN」プロジェクト**では、**学生、アーティスト、東京美術館学芸員、社会福祉施設職員などを囲んだ、学生サミットを既に定期的に展開し、本学の学長も自ら学生の交流会に参加**している。「TURN」プロジェクトは、**東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトの一つとして始動**した後、**2017年度より、東京2020公認文化オリンピアードとして実施**。以降も**2018年よりTURNの海外展開を企画・実施し、これまでに日本国内だけでなく、世界６か国（アルゼンチン、ペルー、ブラジル、エクアドル、キューバ及びポーランド）で活動を展開**している。SDGsのテーマでもある、**障がいの有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた、多様な人々の出会いによる相互作用を引き出すものとして、2020年「TURN on the EARTH」と2021年「TURN茶会」で展覧会を開催**。学生が企画・立案したテーマのもと、各国の障がい者施設や奨学生の児童も含めた参加者が作品制作に加わるワークショップを開催し、個々の展覧会展示に反映されている。

東京藝術大学ではこれまでの上記の「TURN」プロジェクトの成果と実績を踏まえて、**2022年からSDGs、社会包摂など東京芸術大学の社会課題に対する芸術のプロジェクトの総称を「TURN」と呼び、プロジェクトなどのプログラムを「TURN交流プログラム」、サミットやシンポジウムを「TURN　ミーティング」と呼ぶことを検討**している。学生によるサミットは「TURN　ミーティング」の一つとして位置づけられる。

【計画内容】

本プログラム参加学生とGA、GAP学生による**「SDGs x ARTsサミット」をオンラインで開催**。開催内容はWebにアーカイブ、公開する。

国際的な学生のSDGs x ARTsの取り組みを共有する学生主導の「SDGs x ARTsラウンジ」をオンラインで開催。国内の共有・交流は対面でも実施。

上述の「TURNミーティング」の場を通じて、**芸術におけるSDGｓ推進の可能性を共有し、語り、考えあう場。参加アーティストや交流先などの関係者とともに、各分野で活躍するスペシャルゲストを招き、様々な視点から学生交流を提案**する。加えて、現地高校等にも裾野を広げ学生の参加を促しリクルーティング活動へと繋げていく。

※TURNミーティングによる学生とのミーティング風景

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

④-3　オンライン（「JV-Campus」等）を活用したプログラム　【1ページ以内】

【実績・準備状況】

グローバルサポートセンターでは**全学共通科目「日本の芸術・文化を英語で学ぶ」を、外国人留学生向けに英語を主要な授業言語とし開設**している。この授業においては、**日本の芸術の中でも留学生の関心が高い工芸、版画、アニメーション、邦楽の４分野を取り上げ、その歴史と発展を知るとともに、若手作家によるトーク（版画）、実物鑑賞（工芸）、作品上映（アニメーション）、楽器や舞踊の実演（邦楽）などを通して生の表現に触れている**。また、**多様な文化的バックグラウンドを持つ受講者同士のディスカッションやグループワークを行うことで、自分の言葉や視点で作品の背景や魅力を伝える力を育成している**。ディスカッションにおいては**クリティカル・シンキングを重視した教育が展開**されている。こうした取り組みは**各国の伝統文化の中にある、「独自性」と「普遍性」に富んだ古層のグローバルを学ぶコンテンツとして、SDGsの理解を深める上でも重要と考える**。また本授業はすでにオンラインで実施し、貴重な邦楽演奏・英語による解説の様子などもアーカイブとしても記録しているため、JV-Campusの科目に応用することは十分に可能である。

【計画内容】

・令和4～5年度　JV-Campus用にコンテンツ内容の整理
　令和6年度　JV-Campusへの運用開始
　　「SDGs x ARTs」、「日本の芸術・文化を英語で学ぶ」などをテーマにする

（参考）2022年度「日本の芸術・文化を英語で学ぶ」授業計画
　アニメーション　日本アニメーションの起源／人形アニメーションの系譜と進化
　　／1956年～1965年激動の時代
　工芸　日本工芸の黎明／素材別にみる工芸史／明治の超絶技巧から現代工芸へ
　版画　日本版画の今昔／現代アートにおける日本の版画と印刷表現／日本版画の未来
　邦楽　邦楽の多様な世界／能、狂言、歌舞伎の世界／歌舞伎の中の音楽

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

⑤　質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成　【４ページ以内】

【実績・準備状況】

（概要）

成績評価のアップデートは芸術系大学の大きな課題であり、特に**国際連携における評価システム、基準の共有**は重要である。加えて今回の連携校は必ずしもETCS（欧州単位互換制度）・UTCS（アジア太平洋単位互換制度）の対象校とは限らない。本学が参画するShared Campusにおいては**世界各地の大学の評価システムの違いを基に、学習効果の測定に対しても共通な新たな効果測定システムである**「REBEL（Recognition of Experience Based Education and Learning）」**を開発中**である。これはユネスコの**「持続可能な開発のための教育」（Education for Sustainable Development）の分野横断的なコンピテンシーを背景に、学生の学修ポートフォリオを通じた自己評価を、効果測定プロセスに加える試み**である。本学も開発に参加して、**ルーブリック（学習到達度評価基準）と合わせて、新たな学習効果測定**に取り組んでいる。

（単位の実質化）

美術学部・美術研究科では開学以来130年以上の伝統となっている、**学生が制作した作品を教員を交えて相互批評する「講評会」が授業終了時に行われ、実践的な効果測定を行っている。学生相互の成果物批評を通じて、上質なアクティブラーニングを提供し続けており、学修効果の向上に努めている。**

（芸術系大学における作品制作の過程は、人文学系一般の研究と同じく、1つの事象に対して様々な角度から学生に考えさせ、研究成果発表を「表現」という要素を加えた作品制作によって、さらに一段高いレベルで行わせていると考えると理解しやすい。これらは人文・社会学や史学の研究プロセスに則っており、単なる知識や情報の伝達ではなく、**陳腐化しない普遍的な「知」の教授を目的**としていること自体は、他の学問と共通している）

また、両専攻とも毎年開催している**「取手アートパス」・「千住アートパス」**などでの成果発表会の場も用意しており、成果発表審査を行う教員に対する他の教員や学生からの相互チェックに加え、観客・聴衆等学外者による第三者評価も受けながら厳格な成績評価・管理を行っている。

芸術分野の特性として「実習・実技」を重視した科目構成であるが、**大学設置基準に基づいた単位付与**（概ねの科目が1 単位45 時間の実学修時間を確保）となっていることから、単位の実質化は徹底されており、上記の成績評価・審査方法等と併せ、出口管理の厳格化にも結びついている。

美術研究科においてはプロジェクトベースのカリキュラムにおいて、他科ないしは共通の単位を取得できるように**「美術研究科プロジェクト演習」**という単位を設けている。これを積極的に活用するとともに新たなカリキュラム、単位の設定を検討する。

短期の交流プログラムを欧米のサマーブレイク期間に開催し、連携校のアカデミックカレンダーとの重なりを作らないように配慮している。（ロンドン芸術大学の授業開始は9月から、モナッシュ大学は2月から、NIDは10月から）

学内の履修体系について履修体系等に係る情報も含めた英語版Web サイトの整備、シラバス全情報の多言語化、科目ナンバリングも導入、GPA制度やキャップ制度も導入済である。

本学からの派遣学生は、留学先で取得した単位のうち、**学部生は60単位・大学院生は15単位までを上限に認定**でき、認定科目や単位数は教務務委員会等の審議事項とすることで質の保証を担保している。単位互換についても、交換留学先のシラバスと履修時間・評定に関する資料を精査し、本学のカリキュラム内容から逸脱したものでないかを十分に考慮した上で、認定を行っている。

本学においてはすでにグローバルアートプラクティス専攻およびアートプロデュース専攻において、英語で修了可能なコースを設置しており、必要に応じて補助資料を配布している。また、カリキュラムや学事歴なども英語版資料を用意している。

（国際共同学位）

グローバルアートプラクティス専攻においては「グローバル・アート・ジョイント・カリキュラム」において**ロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校と共同授業を毎年開催。７年間の実績**を持つ。**共同で採点、単位付与**を行っている。

グローバルアートプラクティス専攻においては**シラパコーン大学と博士後期課程においてダブルディグリーを開始**している。今後、同専攻のみならず絵画系研究室とともに修士課程のダブルディグリーの検討が始まっている。**映像研究科アニメーション専攻と韓国芸術綜合学校（KARTS）もDDP協定を締結**しており、**2022年5月時点で、本学では合計3件のDDP協定が締結**されている。

ダブルディグリー協定の締結に際しては、都度、相手大学とのミーティングを起こアない、各大学の必修・選択科目一覧の付き合わせ（マッピング）を十分に行いながら、それぞれのカリキュラム内容から大きく逸脱するものがないか精査している。また、学期のずれ（ギャップ・ターム）を十分に考慮し、学生の学修がスムーズになるような配慮をしている。

Shared Campusにおいてもすでに国際共同によるジョイントディグリー、ダブルディグリーの設置に向けて検討会が設けられ、積極的な議論が進められている。本学ではこのネットワークにおけるジョイントディグリー、ダブルディグリーの実施に向けて検討を進める。

（教員体制）
英語等による教育経験を有する日本人教員の配置についても、**グローバルアートプラクティス専攻およびアートプロデュース専攻では、英語での論文指導を行っており、所属する日本人教員は全員学生との英語での指導・コミュニケーションが可能**である。また、**本学教員のおよそ４割は外国での教育研究歴を有している他、芸術系大学の特性である「海外での芸術活動歴」を有する教員までを含めると、およそ８割超の教員が海外での活動実績を有しており、およそ６割を超える教員は外国語で授業を行うことが可能であるなど、国際化に対応した教員組織基盤が整っている。**
また、大学本部グローバルサポートセンターにおいても、Ph.D取得教員を中心に、**アカデミックライティングの指導や、全般的な留学支援**を行っている。

（国際交流協定）
本学は、国際交流協定に基づく連携だけでも**28 ヵ国・地域78 大学・機関と国内芸術系大学では圧倒的多数を誇るが、我が国唯一の国立総合芸術大学の責務として「学位の質保証」や「単位の実質化」を重要視し、協定締結に至るまでに交流実績を重ね、相手大学のカリキュラムや学位審査基準等を仔細に確認した上で単位の相互認定や学位授与・卒業修了要件等を十分協議し、円滑な学生交流や国際教育連携を確保**しており、本学の単位制度および学位授与プロセス等についても、明文化されたものを交流先の大学等に対して提供している。
また、相互に単位が付与される「共同講義」や「共同演習」についても多数の実績を有しており、事前に連携大学間で相互の単位規定や成績評価に係る基準等を確認した上で、適切な運用を行っている。

（SharedCampus）
パートナー大学は**フルパートナー7大学、テーマパートナー6大学**（ヨーロッパ、アジア。アメリカ、アフリカ、南米のメンバー）に分かれており、今回、本学が参画し、また本事業でも協働するのはフルパートナー大学である。
教育機能別にをまとめると、以下の通り。
①**サマースクール**―毎年夏休み期間開催(6月から9月の間）テーマパートナーで協議して共同実施。2022年は7つのプログラムを計画しており、「環境問題」「食糧問題」「土地の歴史」「ハッキング」「オンラインによる即興」「キュレーションの博士合同学習」などを予定。
②**セメスタープログラム**―約3ヶ月(セメスター）を共同で教育し、3カ国以上を渡るプログラムもアレンジ可能。
③**教育ツール開発**― 単位互換/ 評価システムの構築/ 共同授業のアーカイブ化/オンデマンド授業コンテンツ化/ オンラインン教育のツール開発/ ダブルディグリー(修士、博士）など。
④**共同研究**―教員の研究の促進が目的であり、テーマごとに約毎月1回勉強会を開催。各大学がそれぞれの研究課題に沿ってゲストを招き、ミニシンポジウムを開催するなど、活発な活動が行われている。
⑤**国際シンポジウム**―各テーマごとに毎年1回シンポジウムを開催。テーマごとに協議し、毎年企画を検討する。本学教員もスイス大使館共催のもと、昨年オンラインシンポジウム開催し、連日世界から300名以上の聴講者を得た。
⑥**国際ジャーナルへの寄稿**―各テーマでオンラインおよび出版での研究成果発表を行う。加盟大学の教員が研究、教育プログラムを国際的なプラットフォームで発表することができ、国際的な芸術研究ジャーナル編集者が監修している。

第4期中期計画期間の開始、および**SGU終了後の国際事業の自走化**を検討するにあたり、海外大学等との、**質を伴う継続性のあるネットワーク維持**は重要な課題である。加えて、組織間を超えた連携・研究体制の強化は大学の成長には不可欠といえる。教育活動のみならず**国際研究活動の促進**や**体系的な英語教育、論文執筆にかかる体制強化**も必要であり、SharedCampusへの参画についてはこれらの機能強化を図る意義も兼ね備えている。

(キャリア支援・在留資格取得支援)
留学生のアントレプレナーシップ醸成および、卒業後の在留資格取得支援の一環として、出入国管理庁「本邦の大学等を卒業した留学生による起業活動に係る措置について」にある、SGU採択校向けの在留資格「特定活動」の延長措置を活用している。2021年度もこの制度を活用し、留学生の企業活動支援を行った。また、入管協会の賛助会員に加盟しており、留学生の在留資格取得に関するフォロー体制も強化している。

（履修証明プロジェクト［DOORプロジェクト］）
本学ではすでに履修証明プロジェクトとして、**Diversity on the Arts Project （通称：DOOR）にて「アート×福祉」をテーマに「多様な人々が共生できる社会」を支える人材を育成するプロジェクトを展開**している。ここでは**社会人向けに60時間の受講に対する履修証明書**を発行している。加えて、本事業は**SOMPOホールディングスとの産学連携プロジェクトであり、運営面に関しても民間企業のノウハウを取り入れ内容を深めている**。また、プロジェクト内の授業は学生も受講可能であり、学生の受講に対しては単位付与を行っている。これまで「ダイバーシティ実践論」、「ケア原論」などの科目を開設しており、本事業がかかげるSDGｓ推進の目的とも合致している。

（自治体［東京都］との連携事業［とびらプロジェクト］）
東京都との連携事業として2012年より東京都美術館と連携して、**「とびらプロジェクト」**を実施。ここでは、美術館を拠点に、文化資源を活用しながら展覧会鑑賞のサポートや、子ども向けのワークショップなどを、一般ボランティアスタッフと学生からなる**「アートコミュニケーター」**を募り、運営を行っている。本学からは社会協働プロジェクトを専門とする教員が全面的に参加し、各種運営のコーディネートを行っており、本学学生からも社会実践研究の一旦として自主的に活動に参加する学生もいる。
加えて、**上野公園一帯の9つの文化施設（東京芸術大学美術館、東京都美術館、東京国立博物館、国立科学博物館、国立西洋美術館、東京文化会館、上野の森美術館、上野動物園）からなる「Museum Start あいうえの」とも連携**している。
本事業では、こうした自治体連携の場を活かすことが可能で、また美術館運営に学生が携わることでインターンシップとしても活用することができる。

【計画内容】
これまでの国際交流歴を考慮し、**ロンドン芸術大学とはダブルディグリー実施を目標**とする。**交流協定を締結していないモナッシュ大学、National Institute of Designについては、新たに交流協定締結を目指す。**
グローバルアートプラクティス専攻においては、すでに表現領域の制作実践に関する国際共同カリキュラムが確立しているが、アートプロデュース専攻および英豪印の連携校、Shared Campusの参加校とともに相互の特性を活かし、**社会課題解決やイノベーション創出に向けた「リサーチ・ベースド・アート（Research based Art）」を実施**し、**本事業にかかる「SDGs x ARTsグローバルリーダー」の養成を目指す。**

（リサーチ・ベースド・アート ［Research based Art］）
社会学や人類学調査に基づいて作品を制作したり、プロジェクトを行う活動形態。逆に研究者自らも参加する芸術活動を通して，研究課題と問題について理解し探求する研究方法を、Art based Researchとも呼ぶ。こうしたプロセスは、単なる研究発表としてではなく、研究のプロセスを積極的に社会に還元しようとする実践や教育、ワークショップなどで広くみられるようになっている。グローバルアートプラクティス専攻およびアートプロデュース専攻においては、こうした手法による教育・研究活動が活発に行われている。

（教職員体制）
本事業においては、**交流プログラムの核となる「セメスター・コース」および「サマー・コース」の計画・実施・管理等を総合的に担う役割として、英語による指導が可能な専任教員を新たに１名雇用し、将来的な取組への関与も含め、包括的なマネジメント**を行う。また、**学生派遣／受入を、グローバルサポートセンターとの協働により一体的に支援**する。
両コースの実施にあたっては、**事前に両大学の教員が協議を行い、演習のテーマ、教育プログラムの内容、成績評価方法、単位の扱い等について共同で計画し、プログラムの質向上を図る**。また、**実際の授業運営に際しても両大学の教員が指導方法について協議する機会を設ける**ことで、**透明性・客観性が確保**される。**成績管理や単位の実質化についても相互チェックがなされ、教員間の交流により教育研究に係るノウハウが共有され、ＦＤとしても機能**する。

（オンラインの活用）
本事業で主に実施するプログラムでは、Shared Campusの特性も活かしながら、**Web会議や講義のオンラインアーカイブシステムを活用**することで、**相互の学生が自大学にいながら、各自の課題や目標に合わせた学修が進められるプログラム構成とする**ことで、**交流プログラム参加学生の自大学における履修に対する支障を最小限に抑えつつ、今後ますます増加する国際共同プロジェクトに向けた実践的経験が可能となる**。渡航を伴わない期間においても、プログラム内容に関するWeb ミーティングを定期的に開催することで、双方の要望に合わせた柔軟かつ多様なバリエーションの教育プログラムを用意する。

（本学学生への単位付与）
学生への単位付与として、グローバルアートプラクティス専攻では**必修科目「アート・プラクティス」5単位として付与**するか、**自由科目「美術研究科プロジェクト演習」1単位として付与**する（なお、美術研究科他専攻の学生についても「美術研究科プロジェクト演習」として可能）。アートプロデュース専攻の学生については、**必修科目「アートプロデュース総合実習」4単位**か、**選択科目「アートプロデュース概論」または「アートプロデュース演習」2単位**として付与する。
学部生向けには、**「SDGs x ARTs演習（仮）」など、本事業を通じた学修を、教養科目または自由科目で単位化できることを目標**とする。

（成績評価）
Shared Campusで開発中の**「REBEL（Recognition of Experience Based Education and Learning）」システムを導入**し、学生の自己評価に基づく達成度評価を加味する。

（外部有識者からの評価）
取り組み状況ついては、毎年、本学教育担当理事や各学部・研究科長からなる**「グローバル戦略推進委員会」において毎年度確認・成果を分析**し、さらに企業経営者をはじめとした幅広い視野や知見を持つ外部委員会からなる**「グローバル戦略評価・検証委員会」において外部評価を実施**しながらPDCAサイクルにより事業を実施する。

（期待される効果）
　本事業による「SDGs x ARTsグローバルリーダー」の養成により、もたらされる効果を**「世界を幸福にするイノベーション創出」**としてかかげ、以下の２つの視点をもった人材輩出を最終目標とする。
①大学と社会との協働により、イノベーションの創出など新たな価値創造を目指す人材を輩出すること
②芸術を通じてSDGsが推進する、国際的な課題への解決に貢献する人材を育成すること

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

達成目標　【①～④合わせて7ページ以内】

①　将来の関係を見据えた連携強化に資する目標について

（ｉ）事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）

日英豪印の４大学間の関係を強固にし、事業終了後も継続的な国際交流を行えるネットワーク構築を目指し、SDGs x ARTsにかかるグローバル・リーダーの輩出を目的とする。具体的な目標としては、以下のとおり。

①SDGs x ARTsの先進的なカリキュラムの構築：世界規模で関心が高まり、取り組みが始まっているSDGs活動の中でも「SDGs x ARTs」という観点から行動する本学は、この分野において我が国ではパイオニア的な存在であり、本プログラムはその活動の中でも、国際連携の中でグローバルリーダーを育成することを目指したプログラムである。本事業を通じて行うプログラムを軸に、事業期間中に世界をリードするカリキュラムの構築を目指す。
②アジア太平洋地域の平和への貢献：地球規模の課題において国際連携のなかで人材育成を行うことは、政治的、地理的な制約を超えた対話に基づく国際連携であり、この対話の継続は国際平和そしてアジア太平洋地域の安定にも寄与する活動である。連携相手国を中心に地域の近隣国との連携をはじめ、広く地域内での国際連携のプラットフォームへと発展させることを目指す。
③グローバルなリーダー＝アントレプレナー＝イノベーターの養成：行政や経済界と緊密な連携を取ることによって連携国間の国際共同事業、共同研究などを促進する。同時にイノベーションや起業を行うリーダーを輩出することを目指し、社会に新しいインパクトを与えることができるプログラムを目指す。

2022年：キックオフミーティングを実施、アートによるSDGsへの貢献をテーマにしたリサーチ・ベースド・プログラムを試行する。コロナウイルス感染症の流行をみながら、初年度はサマープログラムへのハイブリッド参加を主体とする。
2023年：大学院生のセメスタープログラム、サマープログラムを主体に、学部生向けにアートによるSDGs貢献のための、導入授業を実施する。
2024年：大学院生のセメスタープログラム、サマープログラムを主体に、学部生向けにアートによるSDGs貢献のための、導入授業を実施する。
2025年：大学院生のセメスタープログラム、サマープログラムを主体に、学部生向けにアートによるSDGs貢献のための、導入授業を実施する。
2026年：大学院生のセメスタープログラム、サマープログラムを主体に、学部生向けにアートによるSDGs貢献のための、導入授業を実施する。また5年間の総決算となるシンポジウムを実施する。

（ⅱ）中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）

①パイロットプログラムとして各プログラムの実施：セメスタープログラム、サマープログラムを行うにあたり、アートによるSDGｓへの貢献をテーマにしたリサーチ・ベースド・プログラムを試行する。
②授業プログラムのコンテンツ化：本プログラムで開発された授業内容をコンテンツ化、JV-Campusのコンテンツ化を図り、国際的に本授業を共有化する。
③学生サミット「TURNミーティング」の定着：本プログラム参加学生とGA、GAP学生による「SDGs x ARTsサミット」をオンラインで開催。開催内容はwebにアーカイブ、公開する。国際的な学生のSDGs x ARTsの取り組みを共有する学生主導の「SDGs x ARTsラウンジ」をオンラインで開催。国内の共有・交流は対面でも実施。上述の「TURNミーティング」の場を通じて、芸術におけるSDGｓ推進の可能性を共有し、語り、考えあう場。参加アーティストや交流先などの関係者とともに、各分野で活躍するスペシャルゲストを招き、様々な視点から学生交流を提案する。

2022年：キックオフミーティングを実施、アートによるSDGｓへの貢献をテーマにしたリサーチ・ベースド・プログラムを試行する。コロナウイルス感染症の流行をみながら、初年度はサマープログラムへのハイブリッド参加を主体とする。
2023年：大学院生のセメスタープログラム、サマープログラムを主体に、学部生向けにアートによるSDGｓ貢献のための、導入授業を実施する。

② 養成しようとするグローバル人材像について

（ｉ）事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）

グローバル化とは、異なる文化と交流を持つ反面、自国にも相手国にも新しい変化をもたらすことを意味し、それぞれの文化に優れた「独自性」があり、「普遍性」を有している中、いかに自国と相手国の文化に、「理解」と「尊敬」を持って接していくかが重要となる。これを踏まえ本事業は、芸術が持つ「普遍性」とSDGsの「持続可能性」を根底の部分で合致させ、「世界を幸福にするイノベーション創出」する、以下の２つの視点をもった人材輩出を最終目標とする。

①大学と社会との協働により、イノベーションの創出など新たな価値創造を目指す人材を輩出すること
②芸術を通じてSDGsが推進する、国際的な課題への解決に貢献する人材を育成すること

具体的には、以下の能力の取得を通じて人材の養成を目指す。

1.自国の芸術文化に係る深い造詣と高い専門技能
1-1.各専門分野における我が国の伝統的・現代的・先端的な技術・技法
1-2.当該技術・技法についての特性・歴史・我が国の芸術文化全体における位置付け等に係る知識
2.他国の芸術文化を真に理解する力
2-1.各専門分野における他国の伝統的・現代的・先端的な技術・技法に係る知識
2-2.当該技術・技法と関連する他国の歴史・風土・社会状況等に係る知識
2-3.マルチ・パースペクティブ(多様な視座）、トランスカルチュラル(文化圏を超える、横断する）を踏まえて、他国の考えを聞く力
3.自国の芸術文化を国際的に発信する力
3-1.各専門分野における自国の芸術文化と他国の芸術文化との差異を分析・理解する力
3-2.上記の理解を踏まえた上で自国の芸術文化に係る固有の魅力を見定め、それを紹介する力
3-3.自国と他国の文化を結びつけ、文化的な調和ある共存や連帯を強める力
4.自国および他国の芸術文化に係る専門技能・知識を活かした社会実践力
4-1.芸術文化に関する自らの能力と社会とを結びつけ、具体的な活動を社会の中で実践する力
4-2.上記にあたって特に社会的課題を見つけ出し、ソーシャル・アントレプレナーとして解決する力
4-3.上記にあたって多様な利害関係者と協働し、集団において自らの能力を活かす力
5.上記の能力修得および社会実践を円滑に行う為の語学力
5-1.英語：海外連携大学において現地教員による指導を受け、外国人学生と対話可能な水準
5-2.現地語：社会実践にあたり現地関係者との簡単な意思疎通を図ることが可能な水準

上記の実現に向け、渡航前の事前学習、海外における共同授業・短期研修・交換留学等を通じた結果（アウトプット）として上記の能力を向上させ、また、それによる成果（アウトカム）として、日本の芸術文化の普及・振興・発展、芸術文化交流を通じた国際社会への貢献を実現する。
※本交流プログラムが共同授業を中核としていることから、これに参画する教職員についても、海外において現地教員と連携し共同授業をマネジメントする能力や、連携大学の事務職員と協働し事業を円滑に運営する能力等について目標を定め、FD・SDプログラムとしても機能させる。

（ⅱ）中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）

事業の前半期（2022～2023年度）から、交流プログラムに参画する学生については、上述の全能力を修得することを目標に定めるが、中盤・後半期（2024～2026年度）には、共同授業を通じて組織間理解が深まることにより、また、本事業の目的のひとつである質保証フレームの構築・活用を通じて、特に短期研修や交換留学プログラムを充実させ、共同授業の経験者を中心に派遣することで、より高い水準・深い理解に基づく能力修得を目標とする。

（大学名： 東京芸術大学　　）（主な交流先：　　英国・インド・オーストラリア　　）

③－１　学生に修得させる具体的能力のうち、一定の外国語力基準をクリアする日本人学生数の推移について

○　一定の外国語力基準（外部検定試験のスコア等）をクリアする日本人学生数について適切な目標が設定されているか。（★）

（ｉ）本事業計画において定める外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

単位：人（延べ人数）

	外国語力基準	達成目標	
		中間評価まで（事業開始～2023年度まで）	事後評価まで（事業開始～2026年度まで）
	【参考】本事業計画において派遣する日本人学生合計数		
1	英語：英検準１級、TOEFLiBT50、TOEIC L&R 600、IELTS5.5相当（CEFRにおける「B1」を参考水準とする）	5	14
2			
3			

（ⅱ）外国語力基準を定めた考え方

英語の「B1」は、「身近な話題について主要点を理解できる」「個人的関心事項について脈絡のある文を作ることができる」「経験、出来事を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる」「講義や会議、テレビ番組のおおまかな趣旨を理解できる」と概ね規定され、これは国際共同演習における他国の学生とのコミュニケーションや、海外大学における短期集中講座の受講に必要な水準である。

（ⅲ）事業計画全体の目標達成に向けたプロセス（事業開始～2026年度まで）

事業計画の全体において、英語の上記水準は、交流プログラムへの参加にあたって身に着けておくべき能力要件として定める（ただし、両専攻とも入学選抜時点で一定の語学要件を定めている）。本学の外国語教育専門機関である言語・音声トレーニングセンターによる授業科目・特別講義、グローバルサポートセンターによる特別講座等により英語教育プログラムを提供し、最終的には高度な英語学位論文の執筆への対応も目指す。

（ⅳ）中間評価までの目標達成に向けたプロセス（事業開始～2023年度まで）

2022年度は、英語教育について充実を図り、交流プログラムにおいて必要となる運用能力修得や到達度のチェックに係る体制整備・制度構築を行う。

2023年度からは、プログラムおよびワークショップなどに参加する学生について、上記の外国語力基準を満たす能力を事前に修得させことを目的として、専任教員による実践的な講座を毎年実施する。

（大学名：　東京芸術大学　　）（主な交流先：　　英国・インド・オーストラリア　　）

③－２　学生に修得させる具体的能力のうち、「③－１」以外について

（ｉ）事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）

上記②-(i)の中で、「1-1」「1-2」については、本学における通常の教育プログラムを通して修得することとするが、本事業に係る交流プログラムに参画する学生については、事前学習としてこれらに係るデモンストレーション能力・説明能力を磨く。「2-1」「2-2」「2-3」については、連携大学との共同授業および短期研修・交換留学を通して修得することとし、また、SDGsに精通した各機関等から講師を招聘し、渡航前の事前学習を行う。「3-1」「3-2」「3-3」「4-1」「4-2」については、主として連携大学との共同授業および協働社会実践の中で修得することとし、事後学修としてレポート提出や報告会を課して最終的な成果を測る。

（ⅱ）中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）

事業の前半期（2022～2023年度）から、参加学生には上述の全能力を修得することを目標に定めるが、共同授業・協働社会実践を通じて組織間理解が深まるとともに、参加学生からのフィードバックや外部評価、質保証フレームの構築・活用を通じて、事前学習を含めた交流プログラム全体の質を向上させる。

④　質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成及び拡大に向けた具体的な取組について

（ｉ）事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）

これまでの国際交流歴を考慮し、ロンドン芸術大学とはダブルディグリー実施を目標とする。交流協定を締結していないモナッシュ大学、National Institute of Designについては、新たに交流協定締結を目指す。

グローバルアートプラクティス専攻においては、すでに表現領域の制作実践に関する国際共同カリキュラムが確立しているが、アートプロデュース専攻および英豪印の連携校、Shared Campusの参加校とともに相互の特性を活かし、社会課題解決やイノベーション創出に向けた「リサーチ・ベースド・プログラム（Research based programs）」を新たに確立し、本事業にかかる「SDGs x ARTsグローバルリーダー」の養成を目指す。

実施にあたって、Shared Campusの参加大学教員や産業界や、作家、専門的知識を持つ研究者や評論家等が各プログラムのプレゼンテーションの講評に加わることにより、第3者的な視点からのアドバイスを随時得ることができる。加えて、本学の「グローバル戦略推進委員会」による自己評価、「グローバル戦略評価・検証委員会」による外部評価により、事業の内容および質を定期的に検証する。

（ⅱ）中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）

2022年度は英豪印三大学の教員および必要に応じてShared Campusの参加大学を交えた「SDGs x ARTs会議」を複数回実施する。特にShared Campusの参加大学教員が各プログラムのプレゼンテーションの講評に加わることにより、第3者的な視点からのアドバイスも得ることができる。

（大学名：東京芸術大学　　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

様式２

⑤　本事業計画において海外に留学する日本人学生数の推移【１ページ以内】

○　交流学生数（日本人学生の派遣・外国人学生の受入別、実渡航・オンライン・ハイブリッド、単位取得の有無や交流期間、学部・大学院別）について適切な目標が設定されているか。特に英・豪については日本人学生の派遣超過とならないよう人数のバランスに配慮されているか。（★）

現状（２０２２年５月１日現在）※１　　（単位：人）

（ｉ）日本人学生数の達成目標

単位：延べ人数

事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）	42
中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）	12

（上記の内訳）

（ii）目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）

単位：人

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
実際に渡航する学生		1	1	1	1	4
自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生		3	3	3	3	12
実渡航とオンライン受講を行う学生	2	6	6	6	6	26
合計人数	2	10	10	10	10	42

(a) 実渡航による交流

セメスタープログラム（３ヶ月程度）（大学院生　1名）
1）リサーチ・フェイズ（２週間）
2）インターン・フェイズ（２ヶ月、実際の渡航を伴う）
3）リフレクション＋シェアリング・フェイズ（３週間）

(b) オンライン交流

レクチャープログラム
SDGs推進に関するレクチャーをオンラインにて配信　（学部生　3名）

(c) 実渡航とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の交流

サマープログラム（３週間程度）　（大学院生　初年度2名、以降毎年6名）
1）セッション1―オンライン・自国内学習フェイズ（１週間、JV-Campusの活用）
2）セッション2―インパーソン・オンサイト学習フェイズ―1（１週間-10日、日本での開催）
3）セッション3―インパーソン・オンサイト学習フェイズ―2（１週間-10日、実際の渡航を伴う）

※１　現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における２０２２年５月１日現在の人数。

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：英国・インド・オーストラリア　）

⑥　本事業計画において受け入れる外国人学生数の推移【１ページ以内】

○　交流学生数（日本人学生の派遣・外国人学生の受入別、実渡航・オンライン・ハイブリッド、単位取得の有無や交流期間、学部・大学院別）について適切な目標が設定されているか。特に豪・英については日本人学生の派遣超過とならないよう人数のバランスに配慮されているか。（★）

現状（２０２２年５月１日現在）※１　　（単位：人）

（ｉ）外国人学生数の達成目標

単位：延べ人数

事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）	90
中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）	27

（上記の内訳）
（ⅱ）目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）

単位：人

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
実際に渡航する学生		3	3	3	3	12
自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生		9	9	9	9	36
実渡航とオンライン受講を行う学生	6	9	9	9	9	42
合計人数	6	21	21	21	21	90

(a) 実渡航による交流

セメスタープログラム（３ヶ月程度）（大学院生　各国1名）
1）リサーチ・フェイズ（２週間）
2）インターン・フェイズ（２ヶ月、実際の渡航を伴う）
3）リフレクション＋シェアリング・フェイズ（３週間）

(b) オンラインによる交流

レクチャープログラム
SDGs推進に関するレクチャーをオンラインにて配信　（学部生　各国3名）

(c) 実渡航とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の交流

サマープログラム（３週間程度）　（大学院生　初年度各国2名、以降各国毎年3名）
1）セッション1―オンライン・自国内学習フェイズ（１週間、JV-Campusの活用）
2）セッション2―インパーソン・オンサイト学習フェイズ―1（１週間-10日、日本での開催）
3）セッション3―インパーソン・オンサイト学習フェイズ―2（１週間-10日、実際の渡航を伴う）

※１　現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における２０２２年５月１日現在の人数。

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：英国・インド・オーストラリア　）

様式２

⑦　**交流学生数について**（2022年度は事業開始以後の人数）　（単位：人）

（ｉ）本事業で計画している交流学生数

各年度の派遣及び受入合計人数（交流期間、単位取得の有無等の内訳は（ⅲ）表参照）	2022年度		2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
	2	6	10	21	10	21	10	21	10	21	42	90
実際に渡航する学生（以下「実渡航」）			1	3	1	3	1	3	1	3	4	12
自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生（以下「オンライン」）			3	9	3	9	3	9	3	9	12	36
実渡航とオンライン受講を行う学生（以下「ハイブリッド」）	2	6	6	9	6	9	6	9	6	9	26	42

（ⅱ）国内大学及び交流プログラムごとの交流学生数

交流形態	
①	単位取得を伴う交流期間30日未満の交流
②	単位取得を伴う交流期間30日以上３ヶ月未満の交流
③	単位取得を伴う交流期間３ヶ月以上の交流
④	上記以外の交流期間30日未満の交流
⑤	上記以外の交流期間30日以上３ヶ月未満の交流
⑥	上記以外の交流期間３ヶ月以上の交流

学生別		
A	学部生
B	大学院生

実	実渡航
オ	オンライン
ハ	ハイブリッド

１．【代表申請大学】

大学名　東京芸術大学

交流プログラム名（相手大学名）	交流方向	交流形態	学生別	2022年度			2023年度			2024年度			2025年度			2026年度			合計
				実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	
セメスター・プログラム［交換留学］（ロンドン芸術大学）	派遣	③	B				1												1
サマープログラム（ロンドン芸術大学）	派遣	①	B			2			2			2			2			2	10
ダブルディグリー・プログラム（ロンドン芸術大学）	派遣	③	B													1			1
レクチャー・プログラム（ロンドン芸術大学）	派遣	④	A					1			1			1			1		4
セメスター・プログラム［交換留学］（ロンドン芸術大学）	受入	③	B				1			1			1						3
サマープログラム（ロンドン芸術大学）	受入	①	B			2			3			3			3			3	14
ダブルディグリー・プログラム（ロンドン芸術大学）	受入	③	B													1			1
レクチャー・プログラム（ロンドン芸術大学）	受入	④	A					3			3			3			3		12
セメスター・プログラム［交換留学］（NID）	派遣	③	B							1									1
サマープログラム（NID）	派遣	①	B						2			2			2			2	8
レクチャー・プログラム（NID）	派遣	④	A					1			1			1			1		4
セメスター・プログラム［交換留学］（NID）	受入	③	B				1			1			1			1			4
サマープログラム（NID）	受入	①	B			2			3			3			3			3	14
レクチャー・プログラム（NID）	受入	④	A					3			3			3			3		12
セメスター・プログラム［交換留学］（モナッシュ大学）	派遣	③	B										1						1
サマープログラム（モナッシュ大学）	派遣	①	B						2			2			2			2	8
レクチャー・プログラム（モナッシュ大学）	派遣	④	A					1			1			1			1		4
セメスター・プログラム［交換留学］（モナッシュ大学）	受入	③	B				1			1			1			1			4
サマープログラム（モナッシュ大学）	受入	①	B			2			3			3			3			3	14
レクチャー・プログラム（モナッシュ大学）	受入	④	A					3			3			3			3		12

２．【国内連携大学等】

大学名

交流プログラム名（相手大学名）	交流方向	交流形態	学生別	2022年度			2023年度			2024年度			2025年度			2026年度			合計
				実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	
	派遣																		0
	受入																		0
	派遣																		0
	受入																		0

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

（iii）本事業で計画している交流学生数（派遣・受入別 各内訳の集計）

【日本人学生の派遣】

			2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
年度別合計人数		学生別	2	10	10	10	10	42
【交流形態別　内訳】								
①　単位取得を伴う交流期間30日未満の交流			2	6	6	6	6	26
	実渡航							0
	オンライン							0
	ハイブリッド		2	6	6	6	6	26
②　単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流			0	0	0	0	0	0
	実渡航							0
	オンライン							0
	ハイブリッド							0
③　単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流			0	1	1	1	1	4
	実渡航			1	1	1	1	4
	オンライン							0
	ハイブリッド							0
④　上記以外の交流期間30日未満の交流			0	3	3	3	3	12
	実渡航							0
	オンライン			3	3	3	3	12
	ハイブリッド							0
⑤　上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流			0	0	0	0	0	0
	実渡航							0
	オンライン							0
	ハイブリッド							0
⑥　上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流			0	0	0	0	0	0
	実渡航							0
	オンライン							0
	ハイブリッド							0

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

様式２

【外国人学生の受入】

		2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
年度別合計人数	学生別	6	21	21	21	21	90
【交流形態別　内訳】							
①　単位取得を伴う交流期間30日未満の交流		6	9	9	9	9	42
実渡航							0
オンライン							0
ハイブリッド		6	9	9	9	9	42
②　単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
実渡航							0
オンライン							0
ハイブリッド							0
③　単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流		0	3	3	3	3	12
実渡航			3	3	3	3	12
オンライン							0
ハイブリッド							0
④　上記以外の交流期間30日未満の交流		0	9	9	9	9	36
実渡航							0
オンライン			9	9	9	9	36
ハイブリッド							0
⑤　上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
実渡航							0
オンライン							0
ハイブリッド							0
⑥　上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流		0	0	0	0	0	0
実渡航							0
オンライン							0
ハイブリッド							0

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

（ⅳ）派遣・受入別　交流プログラム学生数の詳細

①日本人学生の派遣【計画】

年度	交流期間			派遣元大学	派遣先大学	派遣相手国	交流内容（交流プログラム名等）	交流形態	学生別	交流学生数	（内訳）		
											実渡航	オンライン	ハイブリッド
令4	6月	～	9月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令5	4月	～	3月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令5	6月	～	9月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令5	6月	～	9月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令5	6月	～	9月	東京芸大	NID	インド	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令5	6月	～	9月	東京芸大	NID	インド	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令5	6月	～	9月	東京芸大	モナシュ大学	豪州	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令5	6月	～	9月	東京芸大	モナシュ大学	豪州	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令6	6月	～	9月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令6	6月	～	9月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令6	4月	～	3月	東京芸大	NID	インド	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令6	6月	～	9月	東京芸大	NID	インド	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令6	6月	～	9月	東京芸大	NID	インド	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令6	6月	～	9月	東京芸大	モナシュ大学	豪州	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令6	6月	～	9月	東京芸大	モナシュ大学	豪州	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令7	6月	～	9月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令7	6月	～	9月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令7	6月	～	9月	東京芸大	NID	インド	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令7	6月	～	9月	東京芸大	NID	インド	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令7	4月	～	3月	東京芸大	モナシュ大学	豪州	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令7	6月	～	9月	東京芸大	モナシュ大学	豪州	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令7	6月	～	9月	東京芸大	モナシュ大学	豪州	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令8	6月	～	9月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令8	6月	～	9月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令8	4月	～	3月	東京芸大	ロンドン芸大	英国	ダブルディグリー・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令8	6月	～	9月	東京芸大	NID	インド	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令8	6月	～	9月	東京芸大	NID	インド	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	
令8	6月	～	9月	東京芸大	モナシュ大学	豪州	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令8	6月	～	9月	東京芸大	モナシュ大学	豪州	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	1		1	

②外国人学生の受入【計画】

年度	交流期間			派遣元大学	派遣相手国	派遣先大学	交流内容（交流プログラム名等）	交流形態	学生別	交流学生数	（内訳）		
											実渡航	オンライン	ハイブリッド
令4	6月	～	9月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令4	6月	～	9月	NID	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令4	6月	～	9月	モナシュ大学	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	2			2
令5	4月	～	3月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令5	6月	～	9月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令5	6月	～	9月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令5	4月	～	3月	NID	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令5	6月	～	9月	NID	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令5	6月	～	9月	NID	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令5	4月	～	3月	モナシュ大学	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令5	6月	～	9月	モナシュ大学	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令5	6月	～	9月	モナシュ大学	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令6	4月	～	3月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令6	6月	～	9月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令6	6月	～	9月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令6	4月	～	3月	NID	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令6	6月	～	9月	NID	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令6	6月	～	9月	NID	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令6	4月	～	3月	モナシュ大学	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令6	6月	～	9月	モナシュ大学	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令6	6月	～	9月	モナシュ大学	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令7	4月	～	3月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令7	6月	～	9月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令7	6月	～	9月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令7	4月	～	3月	NID	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令7	6月	～	9月	NID	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令7	6月	～	9月	NID	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令7	4月	～	3月	モナシュ大学	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令7	6月	～	9月	モナシュ大学	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令7	6月	～	9月	モナシュ大学	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令8	4月	～	3月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	ダブルディグリー・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令8	6月	～	9月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令8	6月	～	9月	ロンドン芸大	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令8	4月	～	3月	NID	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令8	6月	～	9月	NID	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令8	6月	～	9月	NID	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	
令8	4月	～	3月	モナシュ大学	東京芸大	日本	セメスター・プログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1	1		
令8	6月	～	9月	モナシュ大学	東京芸大	日本	サマー・プログラム	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	3			3
令8	6月	～	9月	モナシュ大学	東京芸大	日本	レクチャー・プログラム	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	3		3	

⑧　海外相手大学との単位互換について

○　海外相手大学との単位互換について適切な目標が設定されているか。

（ｉ）単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

（単位：校）

	2022年度		2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施する海外相手大学数	2	6	7	12	7	12	7	12	7	12	30	54

（ii）相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

１．代表申請大学　　【大学名：　東京芸術大学

相手大学名		学生別	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
ロンドン芸術大学（英国）	認定者数	B	2	4	4	4	4	18
	認定単位数	B	2	8	8	8	8	34
モナッシュ大学（オーストラリア）	認定者数	B	2	4	4	4	4	18
	認定単位数	B	2	8	8	8	8	34
National Institute of Design（インド）	認定者数	B	2	4	4	4	4	18
	認定単位数	B	2	8	8	8	8	34
年度別認定者数合計			6	12	12	12	12	54
年度別認定単位合計			6	24	24	24	24	102

２．国内連携大学　　【大学名：　　】

相手大学名		学生別	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
	認定者数							0
	認定単位数							0
	認定者数							0
	認定単位数							0
	認定者数							0
	認定単位数							0
年度別認定者数合計			0	0	0	0	0	0
年度別認定単位合計			0	0	0	0	0	0

（大学名：　東京芸術大学　　）（主な交流先　　英国・インド・オーストラリア　　）

⑨　学生主催イベント・ワークショップの開催数、参加規模について。

○　学生主催イベント・ワークショップの開催数、参加規模（人数、参加国（英・豪・印に限定しない））について適切な目標が設定されているか。（★）

	イベント・ワークショップ名	開催年月	開催回数	参加人数	参加国
1	TURNミーティング	2022	2	20	日英豪印
2	TURNミーティング	2023	3	30	日英豪印
3	TURNミーティング	2024	3	30	日英豪印
4	TURNミーティング	2025	3	30	日英豪印
5	TURNミーティング	2026	3	30	日英豪印

（大学名：　東京芸術大学　　）（主な交流先　　英国・インド・オーストラリア　　）

様式２

⑩　**インターンシップの実施計画について**（2022年度は事業開始以後の人数）　（単位：人）

○　インターンシップを行う計画の場合はその数（日本人学生の派遣・外国人学生の受入別、実渡航・オンライン・ハイブリッド、単位取得の有無や期間、学部・大学院別）について適切な目標が設定されているか。（★）

（ⅰ）本事業で計画している交流学生のうちインターンシップに参加する学生数

	2022年度		2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
各年度の派遣及び受入合計人数（交流期間、単位取得の有無等の内訳は（ⅲ）表参照）	0	0	1	1	0	1	1	1	1	1	3	4
実際に渡航する学生（以下「実渡航」）			1	1		1	1	1	1	1	3	4
自国にてインターンシップをオンラインで受講する学生（以下「オンライン」）											0	0
実渡航とオンライン受講を行う学生（以下「ハイブリッド」）											0	0

（ⅱ）国内大学及びプログラムごとのインターンシップに参加する学生数

交流形態	①	単位取得を伴う交流期間30日未満の交流
	②	単位取得を伴う交流期間30日以上３ヶ月未満の交流
	③	単位取得を伴う交流期間３ヶ月以上の交流
	④	上記以外の交流期間30日未満の交流
	⑤	上記以外の交流期間30日以上３ヶ月未満の交流
	⑥	上記以外の交流期間３ヶ月以上の交流

学生別	A	学部生
	B	大学院生

実	実渡航
オ	オンライン
ハ	ハイブリッド

１．【代表申請大学】

大学名　東京芸術大学

プログラム名（相手大学名）	交流方向	交流形態	学生別	2022年度			2023年度			2024年度			2025年度			2026年度			合計
				実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	
セメスター・プログラム［交換留学］（ロンドン芸術大学）	派遣	③	B				1												1
ダブルディグリー・プログラム（ロンドン芸術大学）	派遣	③	B													1			1
セメスター・プログラム［交換留学］（ロンドン芸術大学）	受入	③	B							1									1
ダブルディグリー・プログラム（ロンドン芸術大学）	受入	③	B													1			1
セメスター・プログラム［交換留学］（モナッシュ大学）	派遣	③	B										1						1
セメスター・プログラム［交換留学］（モナッシュ大学）	受入	③	B				1						1						2

２．【国内連携大学等】

大学名

プログラム名（相手大学名）	交流方向	交流形態	学生別	2022年度			2023年度			2024年度			2025年度			2026年度			合計
				実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	
	派遣																		0
	受入																		0
	派遣																		0
	受入																		0

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

様式２

（ⅲ）本事業で計画している交流学生のうちインターンシップに参加する学生数（派遣・受入別 各内訳の集計）

【日本人学生の派遣】

			2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
年度別合計人数		学生別	0	1	0	1	1	3
【交流形態別　内訳】								
①　単位取得を伴う交流期間30日未満の交流			0	0	0	0	0	0
	実渡航							0
	オンライン							0
	ハイブリッド							0
②　単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流			0	0	0	0	0	0
	実渡航							0
	オンライン							0
	ハイブリッド							0
③　単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流			0	1	0	1	1	3
	実渡航			1		1	1	3
	オンライン							0
	ハイブリッド							0
④　上記以外の交流期間30日未満の交流			0	0	0	0	0	0
	実渡航							0
	オンライン							0
	ハイブリッド							0
⑤　上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流			0	0	0	0	0	0
	実渡航							0
	オンライン							0
	ハイブリッド							0
⑥　上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流			0	0	0	0	0	0
	実渡航							0
	オンライン							0
	ハイブリッド							0

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

様式２

【外国人学生の受入】

		2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
年度別合計人数	学生別	0	1	1	1	1	4
【交流形態別　内訳】							
①　単位取得を伴う交流期間30日未満の交流		0	0	0	0	0	0
実渡航							0
オンライン							0
ハイブリッド							0
②　単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
実渡航							0
オンライン							0
ハイブリッド							0
③　単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流		0	1	1	1	1	4
実渡航			1	1	1	1	4
オンライン							0
ハイブリッド							0
④　上記以外の交流期間30日未満の交流		0	0	0	0	0	0
実渡航							0
オンライン							0
ハイブリッド							0
⑤　上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
実渡航							0
オンライン							0
ハイブリッド							0
⑥　上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流		0	0	0	0	0	0
実渡航							0
オンライン							0
ハイブリッド							0

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

⑪　国際プレゼンスの向上等について

○　自大学及び連携大学以外の大学等において、申請大学が有するコンテンツやノウハウ、ネットワークを活用し、英・印・豪からの新たな留学生層の掘り起こしや我が国・大学の国際プレゼンスの向上を示す指標（留学フェアや、海外連携大学や現地高校へのリクルーティング、国内外連携大学含むオンライン教育科目の開発・提供等）が設定されているか。（★）

（設定指標）

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
（指標１）藝大SDGs X ARTs コンテンツの国際発信 （プロジェクト数）	5	5	5	5	5	25
（指標２）SDGs学生サミット開催数	1	1	1	1	1	5
（指標３）SDGs学生サミット時のリクルーティング開催（海外学校数）	1	1	1	1	1	5
（指標４）						0
（指標５）						0

【計画内容】
本事業を通じて学内において活発化されるであろうSDGs X ARTs について、本学Webサイトを通じた成果普及を行い、発信するコンテンツ数を目標とする。
また、本学ではこれまでTURNプロジェクトを通じて、海外の小学校や特別支援学校等において、多数のワークショップを開いてきた実績がある。本事業を実施するにあたり、学生サミット等のオンライン参加などを通じて、現地高校等にも裾野を広げ学生の参加を促しリクルーティング活動へと繋げていく。

⑫　⑪を除く、学内・学外への事業の波及効果について

○　学内・学外への事業の波及効果を示す指標（例：事業開始後、他部局・国内連携大学における、相手国との大学間交流協定数や学生・研究者交流数（オンライン含む）の推移）について適切な目標が設定されているか。（★）

（設定指標）

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
（指標１）英との新たなダブルディグリー協定の締結数	0	0	0	0	1	1
（指標２）豪印との新たな国際交流協定校の締結数	1	1	0	0	0	2
（指標３）SDGs x ARTs に関する新たな授業科目開設数	0	0	1	0	0	1
（指標４）JV-Campusに関する新たな授業科目開設数	0	0	1	0	0	1
（指標５）						0

【計画内容】
本事業の連携校とのダブルディグリープログラムと、国際交流協定の新規締結を目標とする。合わせて、学部生向けの導入科目の開設および、JV-Campusへのコンテンツ提供を行う。

（大学名： 東京芸術大学　　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

⑬　加点事項に関する取組【2ページ以内】

【実績・準備状況】
（インターンシップ）
　本学は、永きにわたり日本国内の芸術系人材の輩出拠点としての機能を有しており、上野公園一帯の美術館・博物館施設はもとより、全国の美術館や芸術祭において多数が要職につくなど、強固な人材ネットワークを有している。また、海外に活動拠点を移しているOB・OGも多く、これらの人的ネットワークを生かして、国内・海外の美術館や芸術祭の運営スタッフとしてインターンに従事している。また民間企業に対しても教員が有するネットワークも多様で、大手広告代理店やゲーム制作会社をはじめデザイン・建築事務所、各種制作工房や音楽・映像系事務所などへの民間企業との繋がりを多く有している。
　加えて上野公園一帯の芸術施設においては、2020年の東京オリンピックを契機に、「上野文化の杜」立ち上げの中心として、台東区・東京都美術館・東京国立博物館・国立科学博物館などと連携した事業を現在も展開し、特に東京都美術館とは「とびらプロジェクト」として、学生インターンと一般ボランティアが融合した、「アート・コミュニケーター」の育成事業が2012年から展開されており、本学では学生のニーズに合わせた多種多様なインターン先を提供している。

（マイクロクレデンシャル等）
本学ではすでに履修証明プロジェクトとして、Diversity on the Arts Project （通称：DOOR）にて「アート×福祉」をテーマに「多様な人々が共生できる社会」を支える人材を育成するプロジェクトを展開している。ここでは社会人向けに60時間の受講に対する履修証明書を発行している。また、プロジェクト内の授業は学生も受講可能であり、学生の受講に対しては単位付与を行っている。これまで「ダイバーシティ実践論」、「ケア原論」などの科目を開設しており、本事業がかかげるSDGs推進の目的とも合致している。

【計画内容】

英国「TURING SCHEME」について、ロンドン芸術大学においては、アートマネジメント人材の育成コースが活発な活動をしており、国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻において参画している、各種の芸術祭や市民プロジェクトなどを通じて、インターンシップ活動を提供する予定である。
オーストラリア「NEW COLOMBO PLAN」について、モナッシュ大学ではデザイン・建築系の学生が多いため、美術研究科グローバルアートプラクティス専攻を始め、美術学部内のデザイン・建築系の教員の紹介をもとに、各産業へのインターンシップを提供する予定である。
また、上記以外にも各種工房や東京都美術館との連携事業である「とびらプロジェクト」や「DOORプロジェクト」などの参加も視野に入れる。

（左）とびらプロジェクトでは、「こどもと大人のためのミュージアム思考のススメ」などの企画を現役の美術館学芸員と共同して開催し、社会におけるアート・コミュニケーターとしての業務を学生が体験する場を提供している。
（右）DOORプロジェクトでは、社会福祉施設での活動を通じて、学生に福祉活動に関する体験の場を提供している。

（大学名：東京芸術大学　　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備　【①～③合わせて３ページ以内】

① 日本人学生の派遣のための環境整備

【実績・準備状況】

留学中の日本人学生に対する相談体制、生活面等のサポート体制・情報提供等

本学では、グローバル戦略の一環として2014年11月に大学事務局に「国際企画課」を新設、同年12月には「グローバルサポートセンター」を創設し、海外留学を希望する日本人学生を対象に、海外留学に際して必要となる基本情報（単位認定等教学面に係る留学前・留学中・留学後の諸手続や留意点、ビザ等入出国関係、保険・健康管理、留学先の生活関連情報等）について幅広な情報提供を行うとともに、個別相談にも随時応じ、留学中の学生に対してE-mail・Skype等による支援をしている。また、特に昨今の国際情勢への対応として、安全・危機管理に係るマニュアルの作成に加え、派遣先国の連携大学・在外公館等も含め、緊急時を想定した連絡ルート確保に係る仕組みを整備した。加えて、経済的サポートとして、本学「藝大基金」を活用した海外派遣・海外留学に係る給付型奨学金により、意欲のある学生の海外活動を促進している。

学修面・授業履修に関するサポート

本事業を通じて新たに参画する「Shared Campus」とは、芸術系大学の国際的な新たな連携プラットフォームであり、国境を越えた共創的な教育・研究活動を進める取り組みである。

「Shared Campus」は学際的な協働をその考え方の基盤とし、今日の世界の課題解決について（１）社会変革（イノベーションや社会システム等の社会的課題への取り組み）、（２）ポップカルチャー、（３）重要な生態学（気候変動、科学技術との連携）（４）文化・歴史・未来（2021年に先行して本学も参加）、（５）ツール（教育・研究・連携ツールの開発、共同での雑誌発行等）の５つのテーマに分かれて、分野別に共同研究を進めている。共同研究の他に、教育プログラム（サマースクールや制作留学）の開発や連携大学への学生派遣も含まれている。

また、この中にはキャンパス施設の共有や、カリキュラム・ギャップの解消、単位互換等ももちろん視野に入っている。

教育の中心となる、成績評価のアップデートは芸術系大学の大きな課題であり、特に国際連携における評価システム、基準の共有は重要である。「Shared Campus」においては世界各地の大学の評価システムの違いを基に、学習効果の測定に対しても共通な新たな効果測定システムである「REBEL（Recognition of Experience Based Education and Learning）」を開発中であり、本学も開発に参加してルーブリックと合わせて、新たな学習効果測定に取り組んでいる。

加えて、このプラットフォーム内では、学生のモビリティを確保するため、各国大学間の履修単位を「Coin（コイン）」という独自の単位換算方式で計上する新たな試みを行っており、これらの観点から学生の海外渡航時の授業履修に関する支援体制に大きく力を注いでいる。

産業界との連携

本学は、長きにわたり日本国内の芸術系人材の輩出拠点としての機能を有しており、上野公園一帯の美術館・博物館施設はもとより、全国の美術館や芸術祭において多数が要職につくなど、強固な人材ネットワークを有している。また、海外に活動拠点を移しているOB・OGも多く、これらの人的ネットワークを生かして、国内・海外の美術館や芸術祭の運営スタッフとしてインターンに従事している。また民間企業に対しても教員が有するネットワークも多様で、大手広告代理店やゲーム制作会社をはじめデザイン・建築事務所、各種制作工房や音楽・映像系事務所などへの民間企業との繋がりを多く有している。

加えて上野公園一帯の芸術施設においては、2020年の東京オリンピックを契機に、「上野文化の杜」立ち上げの中心として、台東区・東京都美術館・東京国立博物館・国立科学博物館などと連携した事業を現在も展開し、特に東京都美術館とは「とびらプロジェクト」として、学生インターンと一般ボランティアが融合した、「アート・コミュニケーター」の育成事業が2012年から展開されており、本学では学生のニーズに合わせた多種多様なインターン先を提供している。

Diversity on the Arts Project　（通称：DOORプロジェクト）では「アート×福祉」をテーマに、「多様な人々が共生できる社会」を支える人材を育成する活動を行っている。様々なダイバーシティ(多様性)

への気づきや創造性への理解を深め、その背景に福祉があることを体験的に理解する場を提供している。今後、これらの活動を通じた、**社会福祉分野の産業界への新たなイノベーション創出**の可能性に加えて、国内大学への成果普及などが見込まれる。

【計画内容】

本事業では、日本人学生に係る支援については、**スーパーグローバル大学創成支援事業等により構築済の体制・システムを活かした対応**を基本としつつ、更なる強化として、**サポート教員１名を新たに配置する。**（外国人留学生の支援強化として新たに配置する教員・スタッフと同一であり、受入・派遣を総合的に担当することで効率的に業務を行う）。「Shared Campus」の連携により**各種プログラム・ワークショップについては各国の教員によるサポート**が得られ、また、派遣学生に対しては、**受入機関より個人制作のスペースおよび適切な機材が無償で貸与**される。あわせて、コロナ禍に対する対策・サポートも各機関が連携して学生に行う。

② 外国人学生の受入のための環境整備

【実績・準備状況】

外国人学生の在籍管理のための体制整備、各種サポート体制に係る情報提供等

本学では、前述の**「国際企画課」において、外国人学生の在籍管理・学修支援・生活支援・各種手続き支援等を集約的に対応**しており、**「グローバルサポートセンター」の専門スタッフ・サポートスタッフ・日本語教員との連携**や、従来制度を抜本的に改編し研究室・専門領域単位で**全学的に配置した「留学生支援チューター（先輩学生による指導・助言）」のネットワーク化、総合キャリアポートフォリオシステムによる一元的情報管理**等、外国人留学生の支援に係る多重体制を構築している。

学修面・授業履修に関するサポート

本学の美術研究科グローバルアートプラクティス専攻・国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻では、設置以来、英語での論文指導・学位授与を行っており、教職員による受入・指導体制や先輩留学生によるサポート体制やノウハウが十分に整備されている。

また、**手続き、通知、注意喚起等に係る学内資料はすべて英語化を完了**しており、**追加分についても即座に学内で英訳・校正作業を行う業務フローが整備済**である。**履修体系等に係る情報も含めた英語版 Web サイトの整備、シラバス全情報の多言語化（中国語・韓国語を含む）、語学力に優れた教務事務スタッフの配置**による履修指導の円滑化等、受け入れた外国人留学生に困難・不安を感じさせない環境構築がなされている。

加えて、グローバルアートプラクティス専攻においては、すでに**博士後期課程においてタイ・シラパコーン大学とのダブル・ディグリー協定を締結**しており、カリキュラム・ギャップの解消や単位互換に関するマッピング・プロセスなど、海外大学との共同学位授与に必要な手続きを十分に経験している。このため教務面からバックアップについても、経験あるスタッフが対応可能である。

産業界との連携

上述の日本人学生への支援プロセスと同じく、本学には多種多様なインターンシップを提供できる事に加えて、受入れ学生からの関心も高い**日本文化に関する工房または本学が有する同様の施設等への体験学習も提供する**予定である。

グローバル化とは、異なる文化と交流を持つ反面、自国にも相手国にも新しい変化をもたらすことを意味し、**それぞれの文化に優れた「独自性」があり、「普遍性」を有している中、いかに自国と相手国の文化に、「理解」と「尊敬」を持って接していくかが重要**となる。

国際理解を進めるにあたり、各国の歴史の中で積み上げてきた伝統的な芸術の礎である**「古層のグルーバル」**に触れることも SDGs 推進の鍵のひとつである。受入プログラムでは**連携大学の学生を日本の伝統工芸品の制作工房などに学生を派遣**し、本学そして日本に蓄積された自然との共生の叡智を学ぶ授業を導入する。

【計画内容】
本事業では、外国人留学生に係る支援については、**スーパーグローバル大学創成支援事業等により構築済の体制・システムを活かした対応**を基本としつつ、更なる強化として、**サポート教員１名を新たに配置**する。（外国人留学生の支援強化として新たに配置する教員・スタッフと同一であり、受入・派遣を総合的に担当することで効率的に業務を行う）。「Shared Campus」の連携により**各種プログラム・ワークショップについては各国の教員によるサポート**が得られ、また、派遣学生に対しては、**受入機関より個人制作のスペースおよび適切な機材が無償で貸与**される。あわせて、コロナ禍に対する対策・サポートも各機関が連携して学生に行う。

③ 関係大学間の連絡体制の整備

【実績・準備状況】
ロンドン芸術大学（UAL）
大学院グローバルアートプラクティス専攻と共同授業「グローバル・アート・ジョイント・カリキュラム（通称：ロング・ユニット）を毎年開催しており、すでに７年間の実績を持つ。ここでは、日英の学生を長期相互派遣し、共同制作の過程を通じた国際交流を行っており、日英共同で採点、単位付与までを行っている。

National Institute of Design（NID, 印）
本学の美術学部の先端芸術表現科において 2016 年に写真作品を通じた教育交流を行った。また、本年 4 月にも美術研究科グローバルアートプラクティス専攻の今村教授が海外講師プログラムにおいて博士課程学生に対して授業を行った。

モナッシュ大学（MONASH, 豪）
Shared Campus を通して連携。Shared Campus 運営においても年数回にわたる協議の場で意見交換し、緊密な連携をとっている。また本事業担当教員がモナッシュ大学とアーティスト・イン・レジデンス事業を数年にわたって開催し、日豪間で相互にアーティストの派遣招聘を行っていた実績がある。その実績をもとに国際交流協定校にむけた協議を開始している。

【計画内容】
ロンドン芸術大学、モナッシュ大学は芸術大学の国際連携・協働ネットワークであるShared Campusのメンバーで、NID は現在加入の協議中である。Shared Campusの連携会議がほぼ月１回開催されており、**その際に日英豪印の４大学間で連携内容の議論・確認のためのミーティングを開催する。**欧米型のアカデミックカレンダーと日本のアカデミックカレンダーを調整して、欧米の学年修了前の５月、新学年開始時期の１０月、日本の学年末の２月に定期的な連絡会議を設定する。
日英豪印の４大学間の関係を強固にし、**事業終了後も継続的な国際交流を行えるネットワーク構築を目指し、SDGs×ARTsにかかるグローバル・リーダーの輩出を目的**とする。

事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及　【①～②合わせて２ページ以内】

① 事業の実施に伴う大学の国際化

【実績・準備状況】

2014 年度より SGU 事業に採択され、同年 11 月に大学事務局に「国際企画課」を新設、同年 12 月には「グローバルサポートセンター」を創設し、上記のグローバルアートプラクティス専攻・アートプロデュース専攻とともに、学内のグローバル戦略を推進し、2017 年度の本学創立 130 周年を機に策定した「東京藝術大学 NEXT 10 Vision」に沿って、学長のリーダーシップの下、革新性・国際性・多様性のある取組を行っている。また昨年度に SDGs 推進室を設置し、芸術が持つ「普遍性」と SDGｓの「持続可能性」を根底の部分で合致させ、「世界を幸福にするイノベーション創出」に向けた活動を開始しており、本プログラムはこの活動とも密接に連携して計画実施される。

加えて本学が取り組んできた「TURN」「とびらプロジェクト」「DOOR」等のダイバーシティ・社会実践プロジェクトとの連携も図りながら進めていく。

また、今回参画する Shared Campus で進められている事業計画は、ユネスコの「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development) の内容を踏まえることを前提としており、ある一定の大学グループの考え方をまとめることに固執せず、世界共通の指針となるプラットフォーム形成を目指している。

国内おいては「国公立５芸術大学連携ネットワーク」を形成し、毎年度、学長級による定期的な懇談会・連絡協議会開催、各大学が実施するイベントおよび教育プログラムへの相互参加、それらを通じた教育研究に係る知見・ノウハウ・情報の共有・教職員の交流による FD・SD 等が行われている。

さらに、2016 年 7 月に本学の主導により「芸術系大学コンソーシアム」を創設した。2022 年 5 月現在、全国 57 大学が参加しており、他分野でも類を見ない大規模・広範な大学間ネットワークとして国や地方自治体等と協働した多様な芸術文化活動を推進するとともに、全国規模での共同教育プログラムの開発・実施や共同研究の推進、さらには、大学施設や学術文化資源等の共同利用など、大学単体での制約・限界を越えることで、教育研究や芸術活動の質的向上を目指している。

こうした国内ネットワークと、本事業における交流プログラムとを連動させることで、国際共同授業やシンポジウム、展覧会等への参加校・参加学生の増加や、それによる成果の発信・共有が可能となる。

【計画内容】

第４期中期目標・計画に基づき、「世界最高水準の実践的な教育研究」および「芸術の力または芸術と異分野との融合による社会的課題の解決に係る教育研究」を連動的・持続的に行うための「共生・共創プラットフォーム」の形成を推進し、世界・社会で活躍できるアーティスト・実務家等を継続的に輩出しつつ、人材・資金・資源の好循環を構築する。

具体的には引き続き Shared Campus や海外連携プロジェクトを活用し、多様な海外大学/機関等が共通テーマの下に参画／協働するプラットフォームの形成を目指す。

② 国内外への情報提供の方法・体制、成果の普及

【実績・準備状況】

本学では、平成 22 年の学校教育法施行規則改正を踏まえた情報公表は当然として、創立以来、芸術大学の特性に基づき、外部に対する成果の積極的発表・発信を前提とした教育研究を行ってきた実績があり、教育研究成果やその過程・地域連携事業・国際貢献事業等について積極的に情報を公開してきた。近年は、英語を主とした多言語による広報活動を「ブランディング戦略」として推進しており、グローバルサポートセンターを中心として外国語による安定的な情報発信に係る業務フローの構築が完了している。

グローバルサポートセンターでは Web サイト「GEIDAI X GLOBAL」を開設しており、この場にて日英の両言語にて本学の国際交流活動の発信を日常的に行っている。

グローバルアートプラクティス専攻およびアートプロデュース専攻は毎年開催している「取手アートパス」・「千住アートパス」などでの成果発表会の場も用意しており、積極的な成果発信に努めている。

グローバルアートプラクティス専攻がある取手キャンパスにおいては、JR 取手駅・アトレとの共同事業として「たいけん美じゅつ場 VIVA」を実施しており、駅ビル内のフロアを使用して、市民が身近に本学の教育活動とふれあえる場を提供している。

「DOOR」においては、芸術系以外の大学（植草学園大学、関東学院大学、京都大学、東京大学、東京工業大学、松山大学、横浜国立大学、早稲田大学の８大学）との連携実績があり、これらのつながりを通じて、国内大学の異分野領域への成果普及が見込まれる。

本学の SDG s 推進室においても、Web サイトを通じて積極的に成果普及に努めている。
本事業の活動もこれらの媒体を通じて成果発表する準備が整っている。

【計画内容】

上記に加え、SGU 事業に毎年度行っている自己評価を基に、留学生数・海外交流数などの指標評価も継続的に行っており、これらを通じて国際化拠点整備事業によって成果を各所にて公表し、事業全般の成果普及を図る。

交流プログラムを実施する海外相手大学について　【相手大学ごとに①、②合わせて１ページ以内】	
相手大学名 （国名）	ロンドン芸術大学（英国）セントラル・セント・マーチンズ校

① 交流実績（交流の背景）

ロンドン芸術大学とは２０１６年美術学部大学院研究科グローバルアートプラクティス専攻設置以降７年間にわたって共同授業グローバルアートジョイントカリキュラム(セメスタープログラム)を実施し、トップアーティストの育成、本学の国際化に大きく寄与している。７年にわたる共同授業の実施によって、授業目標、授業形式、単位付与の考え方、評価のシステムなど７年にわたる共同作業を通してお互いの教育システムを理解し、それらに基づくカリキュラムを教員間で共同で作成、実施している。

時期	本学の交流者	内容
2016 年度より 2021 年度まで毎年	教職員・学生	本学グローバルアートプラクティス専攻と各連携大学の教員・学生がユニットチームをつくり、双方で単位化した共同授業として東京とロンドンを行き来しながら共同調査・制作を行い、日本およびロンドンにて成果発表を行っている。例年各校とも約 10 名ずつの学生が交流に参加している。ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校の教員は本学卓越教授、卓越助教として共同授業に参画。
2016 年 4 月 14 日	教職員	Jeremy Till 校長、Mark Dunhill 学部長、Anne Smith 学部長、キャンバーウェルの Chris Wainwright 校長、国際渉外部の Edward Venning 部長の 5 名が来学し、全国芸術系大学コンソーシアムに関係する役職員 27 名を交えた懇談会を開催。ブリティッシュ・カウンシルの協力のもと、海外を含めた芸術系大学とのネットワーク構築の重要性について、意見交換を行った。
2018 年 1 月 15 日～19 日	教職員・学生	コース・リーダー（学科長）のアンドレアス・ラング氏を招聘し建築科教員との共同監修をもとにした大学院・学部生の短期集中ワークショップと特別講演を実施。本学建築科から約 10 名の学生がワークショップに参加し、約 50 名の学生が特別講演を聴講。
2018 年	教職員	ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校 Jeremy Till 校長、Josef Wheeler 国際部長、Paul Haywood 学部長、Fred Meller 教授が来日。国際交流協定更新、連携強化を学長と協議。
2018 年	教職員・学生	美術学部・美術研究科と学部長 Rachel Dickson 氏を招聘。工芸科と GAP 協働でショートユニットを開催。卒業展、修了展講評、作品を選抜して公開講義を実施。
2019 年 10 月	教職員・学生	国際芸術創造研究科と陳列館を使ってサウンドアートとフェミニズム、ジェンダーをテーマにしたシンポウム＋ワークショップ「SGFA(Sound:Gender:Feminism:Activism 東京」を開催。

② 交流に向けた準備状況

○　交流プログラムの実施に向けた相手大学との準備（大学ごとの役割・実施体制の明確化等）が十分なされているか。

ロンドン芸術大学とは２０１６年美術学部大学院研究科グローバルアートプラクティス専攻設置以降７年間にわたって共同授業グローバルアートジョイントカリキュラム（セメスタープログラム）を実施し、トップアーティストの育成、本学の国際化に大きく寄与している。７年にわたる共同授業の実施によって、授業目標、授業形式、単位付与の考え方、評価のシステムなど７年にわたる共同作業を通してお互いの教育システムを理解し、それらに基づくカリキュラムを教員間で共同作成し実施している。

交流プログラムを実施する海外相手大学について　【相手大学ごとに①、②合わせて１ページ以内】

相手大学名（国名）	モナッシュ大学（豪州）

② 交流実績（交流の背景）

モナッシュ大学は本学が参画する芸術大学の国際連携プラットフォームである Shared Campus の「クリティカル・エコロジー」のテーマパートナーで、Shared Campus において積極的な活動を行っており、本学教員・学生もシンポジウム等へ参加。

時期	本学の交流者	内容
2019 年から現在	教員・学生	Teaching Exchange：Shared Campus の「クリティカル・エコロジー」のテーマグループにおいて連携大学の共同授業を開催。
2020 年 9 月 18,19 日	教員・学生	Conversations with ten thousand things 與萬物對談 2020：2020 年度第１回 Shared Campus「クリティカル・エコロジー」のテーマグループにおけるシンポジウム。
2021 年 4 月 7 日	教員・学生	Conversations 與萬物對談 2021：On non-human centric approaches：2021 年度第２回 Shared Campus「クリティカル・エコロジー」のテーマグループにおけるシンポジウム。
2021 年 5 月 5 日	教員・学生	Conversations 與萬物對談 2021：Perspective Shift：2021 年度の２回目の Shared Campus の「クリティカル・エコロジー」のテーマグループにおけるシンポジウム。
2021 年 11 月 12,13 日	教員・学生	Embodying Local Knowledges Symposium:Shared Campus「クリティカル・エコロジー」のテーマグループにおける特別シンポジウム。
2021 年 12 月 10 日	教員・学生	Conversations 與萬物對談 2021：Conversations about Value and Waste / An Artist's Perspective。2021 年度第３回 Shared Campus「クリティカル・エコロジー」のテーマグループにおけるシンポジウム。

② 交流に向けた準備状況

○　交流プログラムの実施に向けた相手大学との準備（大学ごとの役割・実施体制の明確化等）が十分なされているか。

モナッシュ大学は本学が参画する芸術大学の国際連携プラットフォームである Shared Campus のテーマパートナーで、2022 年のサマースクールでは本学学生が参加予定。

モナッシュ大学は総合大学で、特に人文科学分野においては文化人類学、アジア研究、オーストラリア民族研究、地理学・環境学、持続可能な環境と社会、国際開発学　などにおいてはオーストラリアを代表する教育研究を行っている。オーストラリアの研究重点 8 大学で、世界トップ 200 の大学のうち 33 位にランクインする名門大学である。

「環境と持続可能性」という大学院コースを持ち、かつ芸術、デザイン、建築学部を持つ総合大学である。この人文主義の教育研究を芸術教育に活かすことができ、社会的な課題に取り組む芸術プログラムを展開している。Shared Campus においてはテーマ・パートナーであるが、その実績と知見において「クリティカル・エコロジー」のテーマにおいて牽引的な役割を担っている。

交流プログラムを実施する海外相手大学について　【相手大学ごとに①、②合わせて１ページ以内】	
相手大学名 （国名）	ナショナル・インスティチュート・オブ・デザイン（NID、インド）

③　交流実績（交流の背景）

2008 年に本学現教員が NID における一ヶ月の短期派遣を経て交流ワークショップを行い、その後 2009-2013 年まで Open Elective と呼ばれる世界中から教員を招く集中実技講座への招聘や、合同企画展覧会の開催など人的・文化交流を継続してきた。2015 年より大学間の交流へと発展し、教員・学生ユニットの相互派遣による共創プロジェクトや国際シンポジウム、美術学部との交流協定締結に向けた協議等、そのつながりが一層深化している。全学指導言語は英語。近年の主な事例を挙げる。

時期	本学の交流者	内容
2013. 10.23-27 （5 日間）	教員	本学映像研究科アニメーション専攻伊藤有壱教授が NID の主催で 3 回目となる国際アニメーションフェスティバル Chitrakatha13 へ招聘。日本アニメーションについてのプレゼンテーションを行った。また Chitrakatha 最優秀アニメーション作品に本学学生作品が入賞。
2015. 3.17-18 （2 日間）	教職員・学生	本学が主催した「国際芸術教育会議 2015」に、NID 写真デザイン科学科長と教員の 2 名が参加。NID の教員と美術学部先端芸術表現科鈴木理策准教授によるメディアアートの協働リサーチワークショップとポートフォリオレビューによる意見交換を開催。全体シンポジウムへ登壇。
2015. 8.30-12.28 （121 日間）	教員・学生	NID 主催、本学共催による日本とインドのメディアアート作家 19 名の国際交流展覧会「Tales & Fables from India & Japan: Animation, Film and Photography」を開催。両学教員がキュレーターとして作家を選定し、美術学部・映像研究科の学生・卒業生合計 7 名が展示参加。インド 2 都市と横浜を巡回し、両国で国際シンポジウムや国際交流ワークショップ、レクチャー、上映会を行った。当初想定した入場者数+233%、報道記事数+280%と両国で初めてとなる企画内容が大きな反響を呼ぶ。文化庁、国際交流基金、在インド国日本大使館、野村財団、ソニーインディア後援。
2016. 9.24-10.2 （9 日間）	教員・学生	美術学部先端芸術表現科鈴木理策准教授と研究室修士課程の学生 5 名によるユニットが渡印し、NID 写真デザイン科の学生 15 名と日印国際交流共創プロジェクトを実施。共同リサーチワークショップとプレゼンテーション、講評、展覧会実施と図録作成をすべて英語で行い、テーマに沿った作品を完成。現地大学ギャラリーでの展覧会の際は一般の観客が多数来場した。
2022.4.25	教員	美術研究科グローバルアートプラクティス専攻の今村有策教授が海外講師プログラムにおいて博士課程学生に対して授業を行った。

② 交流に向けた準備状況

○　交流プログラムの実施に向けた相手大学との準備（大学ごとの役割・実施体制の明確化等）が十分なされているか。

本学と NID 間の交流が深化するにつれ、その交流を国際交流協定締結へとつなげるべく協議が行われている段階である。事業採択後は、本事業の交流プログラムに係る覚書を速やかに締結し、本年度 10 月以降にユニット派遣を実施する。具体的な交流分野として、これまでに交流実績のある美術学部・研究科を中心に、多領域間の交流へと深化させていく。なお、NID は学外からの招聘プロジェクトの受入環境が非常に整っており、デザイン教育における幅広いコースを提供していることから、本事業におけるデザイン分野の多領域・複数分野間の交流も視野に入れる。また、インドにおける交流プログラムの質保証フレーム普及の役割を依頼している。

事業計画の実現性、事業の発展性　【①は１ページ以内、②、③、④は合わせて３ページ以内】
①　年度別実施計画
【2022 年度（申請時の準備状況も記載）】 ４月～：本事業を含む今後の交流について連携大学と協議 ５月～：本プログラムの全学での実施体制を学内で整備 １０月：本プロジェクト実施に係る専任教員・スタッフの雇用 １０月：パイロットプログラム（派遣）を実施（藝大から２名の学生が参加） １０月～：プログラム実施に向けた現地視察のための藝大教員派遣および連携大学教員招聘 １１月：パイロットプログラム（招聘）を実施（連携大学から６名の学生が参加） １１月：「SDGs x Arts 学生サミット」を開催。上記パイロットプログラムで招聘する 連携大学教員教員・学生も参加し事業について意見を交換する。連携大学教員による特別講義も実施。 １１月～：共同プログラムの質保証に向けた協議を開始
【2023 年度】 ４月～：共同プログラム特設 Web サイトおよび学内向け講義アーカイブシステム立上げ ６月：グローバル戦略推進委員会、グローバル戦略評価・検証委員会による自己評価・外部評価 ６月～：セメスタープログラム開始（藝大１名、英豪印から３名の学生が参加。事前の準備期間を含む） ６月～９月：サマープログラム実施（藝大６名、英豪印から９名の学生が参加） ９月：学部生向けのオンライン講座を実施（各国から３名が参加） １月～：次年度プログラムの実施に係る協議を開始 ２～３月：両大学教員および学生による本事業の中間成果報告会 ダブルディグリープログラムに関する協議も合わせて実施。
【2024 年度】 ４月～：共同プログラム特設 Web サイトおよび学内向け講義アーカイブシステム立上げ ６月：グローバル戦略推進委員会、グローバル戦略評価・検証委員会による自己評価・外部評価 ６月～：セメスタープログラム開始（藝大１名、英豪印から３名の学生が参加。事前の準備期間を含む） ６月-９月：サマープログラム実施（藝大６名、英豪印から９名の学生が参加） ９月：学部生向けのオンライン講座を実施（各国から３名が参加） １月～：次年度プログラムの実施に係る協議を開始 ２～３月：両大学教員および学生による本事業の中間成果報告会 ダブルディグリープログラムに関する協議も合わせて実施。
【2025 年度】 ４月～：共同プログラム特設 Web サイトおよび学内向け講義アーカイブシステム立上げ ６月：グローバル戦略推進委員会、グローバル戦略評価・検証委員会による自己評価・外部評価 ６月～：セメスタープログラム開始（藝大１名、英豪印から３名の学生が参加。事前の準備期間を含む） ６月-９月：サマープログラム実施（藝大６名、英豪印から９名の学生が参加） ９月：学部生向けのオンライン講座を実施（各国から３名が参加） １月～：次年度プログラムの実施に係る協議を開始 ２～３月：両大学教員および学生による本事業の中間成果報告会 ダブルディグリープログラム協定締結。
【2026 年度】 ４月～：共同プログラム特設 Web サイトおよび学内向け講義アーカイブシステム立上げ ６月：グローバル戦略推進委員会、グローバル戦略評価・検証委員会による自己評価・外部評価 ６月～：セメスタープログラム開始（藝大１名、英豪印から３名の学生が参加。事前の準備期間を含む） 英国についてはダブルディグリープログラムを実施する。 ６月-９月：サマープログラム実施（藝ら６名、英豪印から９名の学生が参加） ９月：学部生向けのオンライン講座を実施（各国から３名が参加） １月～：次年度プログラムの実施に係る協議を開始 ２～３月：両大学教員および学生による本事業の最終成果報告会

② 交流プログラムの質の向上のための評価体制

○　事業の実施、達成状況を評価し、改善を図るための評価体制が整備されているか。

本事業においては、交流プログラムの核となる「セメスタープログラム」及び「サマープログラム」の計画・実施・管理等を総合的に担う役割として、英語による指導が可能な専任教員を新たに１名雇用し、プログラムの全体なマネジメントを行う。

本事業で実施する「セメスタープログラム」及び「サマープログラム」の実施にあたっては、事前に４大学の教員が協議を行い、演習のテーマ、教育プログラムの内容、成績評価方法、単位の扱い等について共同で計画し、プログラムの質向上を図る。また、オンラインも活用しつつ、授業運営に際しても各大学の教員が一堂に会し、自大学の学生以外の指導等も行うことから、透明性・客観性が確保される。成績管理や単位の実質化についても相互チェックがなされ、教員間の交流により教育研究に係るノウハウが共有され、ＦＤとしても機能する。

また、学内における質の向上のための取組として、本学の「グローバル戦略推進委員会」による自己評価、「グローバル戦略評価・検証委員会」による外部評価により、事業の内容および質を定期的に検証し、PDCA サイクルによって随時改善しながら事業を推進する体制を整備する。

更に、「セメスタープログラム」及び「サマープログラム」の成果発表として開催する一般公開型の展覧会や、本事業特設 Web ページ上で公開し、広く SDGs に関心のある一般層からのフィードバックを受け付け、常時プログラム内容に反映させる。

③ 補助期間終了後の事業展開

○　補助期間終了後も継続的かつ発展的に質の保証を伴った事業が実施されるよう、将来を見据えた計画となっているか。

本学は、2016 年６ 月に中長期的なビジョンとして「学長宣言 2016」及び「大学改革・機能強化吸い進戦略 2016」を策定・公表しており、具体的なアクションプランとして、以下を掲げている。

・海外一線級アーティスト等のユニット誘致による国際共同プロジェクトを推進
・国境を超えた相互交流や芸術文化外交を促進し、世界的な芸術教育研究拠点として国際プレゼンスを確立
・教育研究や芸術活動に係る成果物の社会還元等を通じて戦略的なプロモーション活動を実行
・産業界等との連携基盤を活かしたキャリア支援プログラムの充実

本事業は、全学におけるこの中長期ビジョンに基づくものであり、「第４期中期目標・計画」においても、本事業に係る交流プログラムの意義・方向性等の位置付けは明確であることから、補助期間終了後も交流プログラムを持続的・発展的に実施することは、本学の中・長期的な計画として折り込まれている。

また、様式９④・共通②に記載の通り、グローバルアートプラクティス専攻・アートプロデュース専攻および、グローバルサポートセンターでは以下をグローバル展開戦略として推進している。

・ヨーロッパ各国芸術大学との連携強化：ロンドン芸術大学に加えて、パリ国立高等美術学校やロンドン芸術大学ゴールドスミス校との共同教育プログラムの発展
・AAI（アジア・アートイニシアティブ）を補足し、ASEAN、中央アジアおよび中国・韓国との協力関係を深め、全世界に広がる国際教育ネットワークを構築し、産業界との連携研究の推進も図る

加えて、様式１③に記載の通り、本学は以下の通り国内ネットワークを有している

・国公立５芸術大学連携ネットワーク（教職員・学生交流、芸術教育に係る知見の共有）
・芸術系大学コンソーシアム（芸術系大学全体のプレゼンス向上、教職員・学生の交流促進）

また本学が目指す SDGs 推進は、「世界を幸福にするイノベーション創出」をテーマに、恒久的に取り組むべき課題であり、経済・環境・社会という次元で調和を図った「持続可能な発展」に資するべきものである。そのため、従来は互いに個々に活動してきた分野・領域間の連携が極めて重要であることから、総合芸術大学である本学の強み・特長をフル活用し、美術・音楽・映像・国際芸術創造（アートマネジメント）の各学部・研究科とも一体的に、事業期間中から終了後までの取組を推進していく。

以上を踏まえ、具体的には以下の事項を、補助期間終了後の本事業の展開として計画している。

―連携大学が所在する国内での展開

◆既に交流を開始しているロンドン芸術大学ゴールドスミス校、インド・アーメダーバード大学等と連携大学との、横展開による共同教育交流事業の実施

―連携大学所在国以外の地域への展開

◆本事業の成果に基づいたSDGs教育プログラム輸出戦略としての、Shared Campusにて連携している、チューリッヒ芸術大学・ラ・サール芸術大学・中国美術学院・国立台北芸術大学・香港浸会大学・香港城市大学や、本学が国際交流を行っている各教育機関との共同プログラム開発の実施。

―国内での展開

◆各取組への、国内連携大学の教員・学生および産業界・プロフェッショナル人材の積極的な招致と学内での展開

◆学内各組織とのSDGsに関する共同ワークショップや共同研究の実施

◆DOORプロジェクト、とびらプロジェクト、TURNプロジェクト等で連携している大学・行政団体・その他産業界との更なる事業展開

なお、これらの展開については、本事業と並行して一体的に推進することより、本事業の取組内容および成果に係る質の向上が期待できる為、補助事業開始後から随時検討を進め、可能なものから補助期間中に試行していく。

④ 補助期間終了後の事業展開に向けた資金計画

本事業は、本学の国際化・機能強化戦略の主要事項に位置付けられるものであり、前述の通り本学における国際教育の中核を成すプログラムである為、スーパーグローバル大学創成支援事業等により構築される体制・システム等および将来的な国際貢献・国際共同研究等の諸活動とも有機的に連動させつつ、継続的・発展的に運営していく必要がある。

なお、本事業は、学内でも第4期中期計画の達成に関する重要事業としても位置付けており、令和4年度より「国際共創にかかる新しい取組推進経費」として、新たに1,350万円を自己財源から国際化対策予算に純増計上している。そのため、予定計画にない突発的な事項の対応や、渡航プログラムに至るまでの語学準備コースに関する支出にも対応する準備が出来ている。

加えて、「東京芸術大学芸術国際交流基金」を活用して、海外渡航に係る保険手数料の負担などを検討している。

上記のとおり、安定した財源を準備しているが、更なる安定的な資金・財政基盤の確保に係る方策として、次の観点に基づき、事業費の節減およびマッチングファンドを図る。

■人件費の節減

節減項目（金額）	節減方法
サポート教員 （4,200 千円／年）	オンラインを用いた交流や学生派遣・受入に係る各種手続きを包括的に担当するが、補助期間終了後には業務を従来の体制内で再分配し吸収することで対応する。

■その他費用の節減

節減項目（金額）	節減方法
コーディネーター／通訳、Web ページ管理および更新等（1,500 千円／年）	補助期間中に教員・学生間の英語によるコミュニケーションを定着させることで、コーディネーターを介さない連絡体制を確立する。また、本事業の実施に携わる教職員は実務経験を通じ、Web 環境の構築・維持を既存の体制内で実施できるようにする。

■マッチングファンド

補助期間中の継続的な教育効果の検証、内容の見直しおよび成果の国内外への発信を積極的に行うことで、本事業で構築したプログラムの永続的な実施が有意義であることを相手大学に認識してもらい、補助期間終了後には公平なマッチングファンド体制を確立する。

■オンライン環境を効果的に用いた事業経費の逓減

オンライン環境を用いた情報共有体制の強化を通じ、調査・協議に関する旅費の逓減を実現することで、財政面においても持続可能なプログラムへと発展させる。

補助期間における各経費の明細【年度ごとに1ページ】

補助金申請ができる経費は、当該事業の遂行に必要な経費であり、本プログラムの目的である大学の世界展開力強化のための使途に限定されます。（令和４年度大学の世界展開力強化事業公募要領参照。）

（単位：千円）

＜2022年度＞　経　費　区　分	補助金申請額（①）	大学負担額（②）	事業規模（総事業費）（①＋②）	備考
［物品費］	1,732	0	1,732	
①設備備品費	1,100	0	1,100	
・国際共同授業教材	1,100		1,100	
・			0	
・			0	
②消耗品費	632	0	632	
・事務消耗品	132		132	
・国際共同授業材料費	500		500	
・			0	
［人件費・謝金］	5,150	1,610	6,760	
①人件費	4,550	1,610	6,160	
・プロジェクト助教（@400千円×7）	2,800		2,800	
・プロジェクト助手（@250千円×7）	1,750		1,750	
・事務スタッフ（@230千円×7）		1,610	1,610	
②謝金	600	0	600	
・授業外部講師謝金（@100千円×3）	300		300	
・シンポジウムイベント登壇謝金（@100千円×3）	300		300	
・			0	
［旅費］	6,000	0	6,000	
・プロジェクト協議旅費（派遣）（3名）	1,200		1,200	
・パイロットプログラム教員旅費（派遣）（3名）	1,200		1,200	
・プロジェクト協議旅費（招聘）（3名）	1,200		1,200	
・パイロットプログラム教員旅費（招聘）（3名）	1,200		1,200	
・シンポジウムイベント講師旅費（3名）	1,200		1,200	
・			0	
・			0	
［その他］	7,118	0	7,118	
①外注費	3,100	0	3,100	
・Webページ制作	1,300		1,300	
・プロジェクト関連資料英訳一式	1,500		1,500	
・特設Webページ管理および更新	300		300	
②印刷製本費	500	0	500	
・プログラム紹介冊子/報告書印刷	500		500	
・			0	
・			0	
③会議費	300	0	300	
・シェアード・キャンパス事務経費	200		200	
・シンポジウムイベント会議費	100		100	
・			0	
④通信運搬費	18	0	18	
・海外渡航に伴う通信機器レンタル	18		18	
・			0	
⑤光熱水料	0	0	0	
・			0	
⑥その他（諸経費）	3,200	0	3,200	
・パイロットプログラム派遣学生旅費（2名）	800		800	
・パイロットプログラム招聘学生旅費（6名）	2,400		2,400	
・			0	
2022年度　合計	20,000	1,610	21,610	

（大学名：　東京芸術大学　　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

（前ページの続き）　　（単位：千円）

＜2023年度＞　経　費　区　分	補助金申請額（①）	大学負担額（②）	事業規模（総事業費）（①＋②）	備考
［物品費］	291	0	291	
①設備備品費	0	0	0	
・			0	
・			0	
・			0	
②消耗品費	291	0	291	
・事務消耗品	91		91	
・国際共同授業材料費	200		200	
・			0	
［人件費・謝金］	8,300	2,760	11,060	
①人件費	7,800	2,760	10,560	
・プロジェクト助教（@400千円×12）	4,800		4,800	
・プロジェクト助手（@250千円×12）	3,000		3,000	
・事務スタッフ（@230千円×12）		2,760	2,760	
②謝金	500	0	500	
・外部講師謝金（@100千円×3）	300		300	
・シンポジウムイベント登壇謝金（@100千円×2）	200		200	
・			0	
［旅費］	3,600	0	3,600	
・サマースクール教員旅費（派遣）（3名）	1,200		1,200	
・セメスタープログラム教員旅費（招聘）（1名）	400		400	
・サマースクール教員旅費（招聘）（3名）	1,200		1,200	
・シンポジウムイベント講師旅費（2名）	800		800	
・			0	
・			0	
・			0	
［その他］	5,809	500	6,309	
①外注費	300	0	300	
・特設Webページ管理および更新	300		300	
・			0	
・			0	
②印刷製本費	0	500	500	
・プログラム紹介冊子/報告書印刷		500	500	
・			0	
・			0	
③会議費	300	0	300	
・シェアード・キャンパス事務経費	200		200	
・シンポジウムイベント会議費	100		100	
・			0	
④通信運搬費	9	0	9	
・海外渡航に伴う通信機器レンタル（@15千円×6）	9		9	
・			0	
・			0	
⑤光熱水料	0	0	0	
・			0	
・			0	
・			0	
⑥その他（諸経費）	5,200	0	5,200	
・セメスターコース学生旅費（派遣）（1名）	400		400	
・サマースクール学生旅費（派遣）（3名）	1,200		1,200	
・セメスターコース学生旅費（招聘）（3名）	1,200		1,200	
・サマースクール学生旅費（招聘）（6名）	2,400		2,400	
2023年度　合計	18,000	3,260	21,260	

（大学名：　東京芸術大学　　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

（前ページの続き）　　（単位：千円）

＜2024年度＞　経　費　区　分	補助金申請額（①）	大学負担額（②）	事業規模（総事業費）（①＋②）	備考
［物品費］	91	200	291	
①設備備品費	0	0	0	
・			0	
・			0	
・			0	
②消耗品費	91	200	291	
・事務消耗品	91		91	
・国際共同授業材料費		200	200	
・			0	
［人件費・謝金］	8,300	2,760	11,060	
①人件費	7,800	2,760	10,560	
・プロジェクト助教（@400千円×12）	4,800		4,800	
・プロジェクト助手（@250千円×12）	3,000		3,000	
・事務スタッフ（@230千円×12）		2,760	2,760	
②謝金	500	0	500	
・外部講師謝金（@100千円×3）	300		300	
・シンポジウムイベント登壇謝金（@100千円×2）	200		200	
・			0	
［旅費］	2,000	1,600	3,600	
・サマースクール教員旅費（派遣）（3名）	400	800	1,200	
・セメスタープログラム教員旅費（招聘）（1名）	400		400	
・サマースクール教員旅費（招聘）（3名）	400	800	1,200	
・シンポジウムイベント講師旅費（2名）	800		800	
・			0	
・			0	
・			0	
［その他］	5,809	500	6,309	
①外注費	300	0	300	
・特設Webページ管理および更新	300		300	
・			0	
・			0	
②印刷製本費	0	500	500	
・プログラム紹介冊子/報告書印刷		500	500	
・			0	
・			0	
③会議費	300	0	300	
・シェアード・キャンパス事務経費	200		200	
・シンポジウムイベント会議費	100		100	
			0	
④通信運搬費	9	0	9	
・海外渡航に伴う通信機器レンタル（@15千円×6）	9		9	
・			0	
・			0	
⑤光熱水料	0	0	0	
・			0	
・			0	
・			0	
⑥その他（諸経費）	5,200	0	5,200	
・セメスターコース学生旅費（派遣）（1名）	400		400	
・サマースクール学生旅費（派遣）（3名）	1,200		1,200	
・セメスターコース学生旅費（招聘）（3名）	1,200		1,200	
・サマースクール学生旅費（招聘）（6名）	2,400		2,400	
2024年度　合計	16,200	5,060	21,260	

（大学名：　東京芸術大学　　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

（前ページの続き）　（単位：千円）

＜2025年度＞　経　費　区　分	補助金申請額（①）	大学負担額（②）	事業規模（総事業費）（①＋②）	備考
［物品費］	271	0	271	
①設備備品費	0	0	0	
・			0	
・			0	
・			0	
②消耗品費	271	0	271	
・事務消耗品	71		71	
・国際共同授業材料費	200		200	
・			0	
［人件費・謝金］	5,300	5,760	11,060	
①人件費	4,800	5,760	10,560	
・プロジェクト助教（@400千円×12）	4,800		4,800	
・プロジェクト助手（@250千円×12）		3,000	3,000	
・事務スタッフ（@230千円×12）		2,760	2,760	
②謝金	500	0	500	
・外部講師謝金（@100千円×3）	300		300	
・シンポジウムイベント登壇謝金（@100千円×2）	200		200	
・			0	
［旅費］	3,200	400	3,600	
・サマースクール教員旅費（派遣）（3名）	800	400	1,200	
・セメスタープログラム教員旅費（招聘）（1名）	400		400	
・サマースクール教員旅費（招聘）（3名）	1,200		1,200	
・シンポジウムイベント講師旅費（2名）	800		800	
・			0	
・			0	
・			0	
［その他］	5,809	500	6,309	
①外注費	300	0	300	
・特設Webページ管理および更新	300		300	
・			0	
・			0	
②印刷製本費	0	500	500	
・プログラム紹介冊子/報告書印刷		500	500	
・			0	
・			0	
③会議費	300	0	300	
・シェアード・キャンパス事務経費	200		200	
・シンポジウムイベント会議費	100		100	
・			0	
④通信運搬費	9	0	9	
・海外渡航に伴う通信機器レンタル（@15千円×6）	9		9	
・			0	
・			0	
⑤光熱水料	0	0	0	
・			0	
・			0	
・			0	
⑥その他（諸経費）	5,200	0	5,200	
・セメスターコース学生旅費（派遣）（1名）	400		400	
・サマースクール学生旅費（派遣）（3名）	1,200		1,200	
・セメスターコース学生旅費（招聘）（3名）	1,200		1,200	
・サマースクール学生旅費（招聘）（6名）	2,400		2,400	
2025年度　合計	14,580	6,660	21,240	

（大学名：　東京芸術大学　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

（前ページの続き）　　（単位：千円）

＜2026年度＞　経　費　区　分	補助金申請額（①）	大学負担額（②）	事業規模（総事業費）（①＋②）	備考
［物品費］	213	0	213	
①設備備品費	0	0	0	
・			0	
・			0	
・			0	
②消耗品費	213	0	213	
・事務消耗品	73		73	
・国際共同授業材料費	140		140	
・			0	
［人件費・謝金］	5,300	5,760	11,060	
①人件費	4,800	5,760	10,560	
・プロジェクト助教（@400千円×12）	4,800		4,800	
・プロジェクト助手（@250千円×12）		3,000	3,000	
・事務スタッフ（@230千円×12）		2,760	2,760	
②謝金	500	0	500	
・外部講師謝金（@100千円×3）	300		300	
・シンポジウムイベント登壇謝金（@100千円×2）	200		200	
・			0	
［旅費］	2,000	1,600	3,600	
・サマースクール教員旅費（派遣）（3名）		1,200	1,200	
・セメスタープログラム教員旅費（招聘）(1名)		400	400	
・サマースクール教員旅費（招聘）（3名）	1,200		1,200	
・シンポジウムイベント講師旅費（2名）	800		800	
・			0	
・			0	
・			0	
［その他］	5,609	500	6,109	
①外注費	100	0	100	
・特設Webページ管理および更新	100		100	
・			0	
・			0	
②印刷製本費	0	500	500	
・プログラム紹介冊子/報告書印刷		500	500	
・			0	
・			0	
③会議費	300	0	300	
・シェアード・キャンパス事務経費	200		200	
・シンポジウムイベント会議費	100		100	
・			0	
④通信運搬費	9	0	9	
・海外渡航に伴う通信機器レンタル（@15千円×6）	9		9	
・			0	
・			0	
⑤光熱水料	0	0	0	
・			0	
・			0	
・			0	
⑥その他（諸経費）	5,200	0	5,200	
・セメスターコース学生旅費（派遣）（1名）	400		400	
・サマースクール学生旅費（派遣）（3名）	1,200		1,200	
・セメスターコース学生旅費（招聘）（3名）	1,200		1,200	
・サマースクール学生旅費（招聘）（6名）	2,400		2,400	
2026年度　合計	13,122	7,860	20,982	

（大学名：　東京芸術大学　　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

様式８

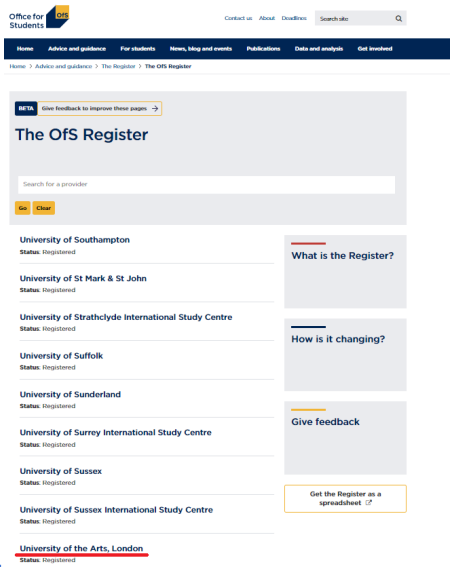
海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて２ページ以内】

①交流プログラムを実施する相手大学の概要

大学名称	（日）ロンドン芸術大学 （英）University of the Arts London		国名	イギリス	
設置形態	国立				
設置者（学長等）	James Purnell（セントラル・セント・マーチンズ）				
学部等の構成	セントラル・セント・マーチンズ校： 大学院　Culture, Criticism and Curation/Applied Imagination in the Creative Industries/Art and Science/Fashion/Character Animation　ほか 学部　Fashion/Performance: Design and Practice/ Product and Industrial Design/Textile Design　ほか				
学生数	総数	21,092人	学部生数	15,895人	大学院生数 3,782人
受け入れている留学生数	11,600人	日本からの留学生数	155人		
海外への派遣学生数	-	日本への派遣学生数	-		
Webサイト（URL）	https://www.arts.ac.uk/				

②記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。

イギリス政府HP上の認可大学
https://www.officeforstudents.org.uk/advice-and-guidance/the-register/the-ofs-register/#/
↓



Organisation name	Organisation country	Region
University of Surrey	England	South East
University of Sussex	England	South East
University of the Arts London	England	London
University of the Highlands and Islands	Scotland	Scotland
University of the West of Scotland	Scotland	Scotland
University of Ulster	Northern Ireland	Northern Ireland
University of Wales Trinity Saint David	Wales	Wales
University of Warwick	England	West Midlands
University of Westminster	England	London
University of Winchester	England	South East
University of Wolverhampton	England	West Midlands
University of Worcester	England	West Midlands
University of York	England	Yorkshire
York St John University	England	Yorkshire

↑
Turing Scheme被採択機関としての記載
https://www.turing-scheme.org.uk/wp-content/uploads/2022/03/Turing-Scheme-2021-Funded-Organisations-Higher-Education.pdf?x39275

（大学名：　東京芸術大学　　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

様式８

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

（大学名： 東京芸術大学　　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　　）

様式８

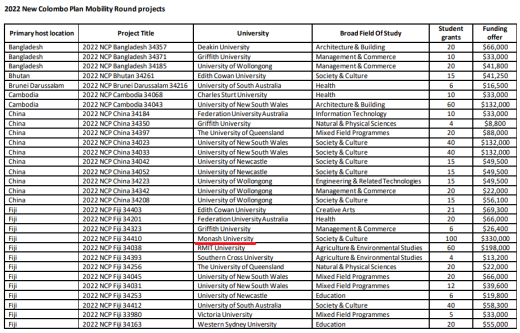
海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて２ページ以内】

①交流プログラムを実施する相手大学の概要

大学名称	（日）モナシュ大学 （英）Monash University		国名	オーストラリア	
設置形態	公立大学（州立）				
設置者（学長等）	学長　Alan Finkel				
学部等の構成	Art and Design/Arts/Business & Economics/Education Engineering/Information Technology/Law/ Medicine, Nursing & Health Sciences/ Pharmacy (Victorian College of Pharmacy)/Science				
学生数	総数	86,753人	学部生数	55,650人	大学院生数 30,628人
受け入れている留学生数	29,912人	日本からの留学生数		-	
海外への派遣学生数	-	日本への派遣学生数		-	
Ｗｅｂサイト（ＵＲＬ）	https://www.monash.edu/				

②記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。

・認可大学としての記載
オーストラリア政府HP上の認可大学リストページ ’List of Australian Universities’
https://www.studyaustralia.gov.au/english/study/universities-higher-education/list-of-australian-universities
↓



2022 New Colombo Plan Mobility Round projects

Primary host location	Project Title	University	Broad Field Of Study	Student grants	Funding offer
Bangladesh	2022 NCP Bangladesh 34357	Deakin University	Architecture & Building	20	$66,000
Bangladesh	2022 NCP Bangladesh 34371	Griffith University	Management & Commerce	10	$33,000
Bangladesh	2022 NCP Bangladesh 34385	University of Wollongong	Management & Commerce	20	$41,800
Bhutan	2022 NCP Bhutan 34261	Edith Cowan University	Society & Culture	15	$41,250
Brunei Darussalam	2022 NCP Brunei Darussalam 34216	University of South Australia	Health	6	$16,500
Cambodia	2022 NCP Cambodia 34068	Charles Sturt University	Health	10	$33,000
Cambodia	2022 NCP Cambodia 34043	University of New South Wales	Architecture & Building	60	$132,000
China	2022 NCP China 34184	Federation University Australia	Information Technology	10	$33,000
China	2022 NCP China 34350	Griffith University	Natural & Physical Sciences	4	$8,800
China	2022 NCP China 34397	The University of Queensland	Mixed Field Programmes	20	$88,000
China	2022 NCP China 34023	University of New South Wales	Society & Culture	40	$132,000
China	2022 NCP China 34033	University of New South Wales	Society & Culture	40	$132,000
China	2022 NCP China 34042	University of Newcastle	Society & Culture	15	$49,500
China	2022 NCP China 34052	University of Newcastle	Society & Culture	15	$49,500
China	2022 NCP China 34223	University of Wollongong	Engineering & Related Technologies	15	$49,500
China	2022 NCP China 34342	University of Wollongong	Management & Commerce	20	$22,000
China	2022 NCP China 34208	University of Wollongong	Society & Culture	15	$56,100
Fiji	2022 NCP Fiji 34403	Edith Cowan University	Creative Arts	21	$69,300
Fiji	2022 NCP Fiji 34201	Federation University Australia	Health	20	$66,000
Fiji	2022 NCP Fiji 34323	Griffith University	Management & Commerce	6	$26,400
Fiji	2022 NCP Fiji 34410	Monash University	Society & Culture	100	$330,000
Fiji	2022 NCP Fiji 34038	RMIT University	Agriculture & Environmental Studies	60	$198,000
Fiji	2022 NCP Fiji 34393	Southern Cross University	Agriculture & Environmental Studies	4	$13,200
Fiji	2022 NCP Fiji 34256	The University of Queensland	Natural & Physical Sciences	20	$22,000
Fiji	2022 NCP Fiji 34045	University of New South Wales	Mixed Field Programmes	20	$66,000
Fiji	2022 NCP Fiji 34031	University of New South Wales	Mixed Field Programmes	12	$39,600
Fiji	2022 NCP Fiji 34253	University of Newcastle	Education	6	$19,800
Fiji	2022 NCP Fiji 34412	University of South Australia	Society & Culture	40	$58,300
Fiji	2022 NCP Fiji 33980	Victoria University	Mixed Field Programmes	5	$33,000
Fiji	2022 NCP Fiji 34163	Western Sydney University	Education	20	$55,000

・NEW COLOMBO PLAN被採択機関としての記載
NEW COLOMBO PLAN HP上に掲載されている2022年度採択プロジェクトリスト
https://www.dfat.gov.au/sites/default/files/new-colombo-plan-mobility-round-projects-2022.pdf

（大学名：　東京芸術大学　　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

様式８

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

（大学名： 東京芸術大学　　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　　）

様式８

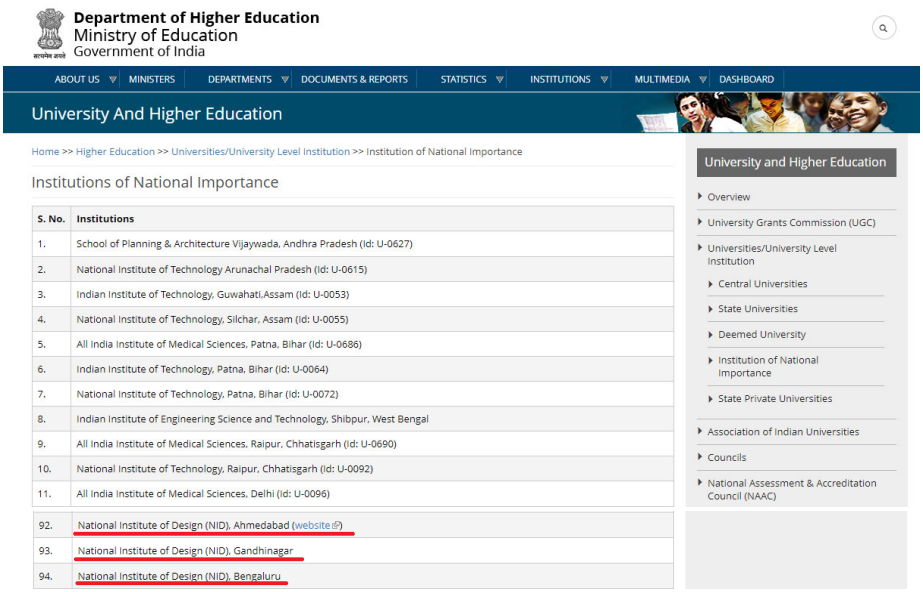
海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて２ページ以内】

①交流プログラムを実施する相手大学の概要

大学名称	（日）ナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン （英）National Institute of Design, NID		国名	インド	
設置形態	国立				
設置者（学長等）	Praveen Nahar（Director's Message　理事長）				
学部等の構成	コミュニケーションデザイン学部 産業デザイン学部				
学生数	総数	434人	学部生数	144人	大学院生数 290人
受け入れている留学生数	51人	日本からの留学生数	1人		
海外への派遣学生数	7人	日本への派遣学生数	-		
Ｗｅｂサイト（ＵＲＬ）	https://www.nid.edu/home				

②記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。

National Institute of Design
・認可大学としての記載
インド政府 Ministry of Education HP上の認可教育機関リストページ
https://www.education.gov.in/en/institutions-national-importance



（大学名： 東京芸術大学　　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　　）

様式８

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

（大学名： 東京芸術大学　　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　　）

様式９

参考データ【国内の大学等１校につき、①～③は枠内に記入、④～⑥はそれぞれ指定ページ以内】
※人数等の算定に当たっては、原則として「学校基本調査」による定義に基づき記入。

大学等名	東京藝術大学

①大学等全体における出身国別の留学生の受入総数（2019年５月１日現在）及び各出身国（地域）別の2019年度の留学生受入人数

※「留学生」とは、「出入国管理及び難民認定法」別表１に定める「留学」の在留資格を有する者に限る。
※「2019年度受入人数」は、2019年４月１日～2020年３月３１日の出身国（地域）別受入人数を記入。
※「全学生数」には、日本人学生及び外国人留学生を含めた大学等全体の2019年5月1日現在の在籍者数を記入。

順位	出身国（地域）	受入総数	2019 年度受入人数
1	中華人民共和国	186	98
2	韓国	39	17
3	台湾	15	10
4	イギリス	4	5
5	アルゼンチン	3	1
6	ブラジル	3	1
7	シンガポール	3	1
8	香港	3	3
9	ドイツ	3	6
10	アメリカ合衆国	3	0
その他（上記１０カ国以外）	（主な国名） ロシア・オーストラリアなど	38	34
留学生の受入人数の合計		300	176
全学生数		3441	
留学生比率		8.7%	

②2019年度中に留学した日本人学生数及び派遣先大学合計校数

※教育又は研究等を目的として、2019年度中（2019年４月１日から2020年３月３１日まで）に海外の大学等（海外に所在する日本の大学等の分校は除く。）に留学した日本人学生について記入。
なお、2019年３月３１日以前から継続して留学している者は含まない。

順位	派遣先大学の所在国（地域）	派遣先大学名	2019年度派遣人数
1	フランス	パリ国立美術学校	98
2	韓国	韓国芸術総合大学	30
3	アメリカ	南カリフォルニア大学	23
4	ドイツ	シュトゥトガルト美術大学	17
5	タイ	シラパコーン大学	15
6	イギリス	英国王立音楽院	15
7	インドネシア	インドネシア国立芸術大学	9
8	ミャンマー	ミャンマー国立文化芸術大学	9
9	シンガポール	ラサール芸術大学	7
10	オーストリア	ウィーン国立音楽大学	6
その他（上記１０カ国以外）	（主な国名） イタリア 計 29 カ国	（主な大学名）ミラノ工科大学 計 49 校	88
派遣先大学合計校数		59	
派遣人数の合計			317

（大学名： 東京芸術大学 ）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア ）

大学等名	東京芸術大学

③大学等全体における外国人教員数（兼務者を含む）（2022年５月１日現在）

※「全教員数」には大学等に在籍する日本人教員も含めた全教員数を記入。
※「うち専任教員（本務者）数」には教授、准教授、講師、助教、助手の専任の外国人教員の数をそれぞれ記入。
（いずれにも当てはまらない場合には、「助手」に含めること。）

全教員数	外国人教員数						外国人教員の比率
	教授	准教授	講師	助教	助手	合計	
845	4	4	0	7	13	28	3%
うち専任教員（本務者）数	4	4	0	6	1	15	

大学等名	東京芸術大学

④取組の実績　【4ページ以内】

ダブルディグリー協定
■交換留学での学習モデルをもとにして、美術分野ではタイ・シラパコーン大学、ポーランド・ヴロツワフ美術大学、映像分野では韓国芸術総合大学とダブルディグリー協定が締結されている。

分野横断を基盤とした３つの教育研究組織の取組
■美術研究科グローバルアートプラクティス専攻
2016年4月に設置し、ロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校などの美術系大学とユニットを組んで世界トップクラスの講師陣を海外から招へいしつつ、グローバルな文脈で現代アートの社会実践上の重要問題を取り上げた講義・リサーチ・ワークショップ・制作・発表等から成る「グローバルアート国際共同カリキュラム」を編成し、グローバルな文脈で現代アートの社会実践を志向する研究と人材育成を行っている。本学が創設以来培ってきた木工芸・染色・和紙・彫刻・ガラス・金工等の伝統技法の学修も織り交ぜていることが特徴であり、授業は原則として英語で行い、創設以降の国際色豊かな取組は、ウェブサイトに日英両語で発信している。
（http://gap.geidai.ac.jp/GAP_JP/Archive/publication.html）

■国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻
2016年4月に設置し、美術・音楽・映像など様々な芸術ジャンルを専門とする教員・学生が、公演・展覧会、ワークショップ、セミナーなどの多様な形態で行われる文化事業をジャンル横断的に「アートマネジメント」「キュレーション」「リサーチ」の３つの角度から学んでいる。2018年4月には博士後期課程を新たに設置し、既に設置していた同修士課程と併せ、芸術文化と社会とを繋ぐ高度専門人材の育成プログラムが強化された。世界各国を拠点に活躍し顕著な業績を有する外国人教員も招へいして、分野に偏らず最新のアートの動向を踏まえた教育を行っている。
「アートマネジメント」：公演や作品などの企画・制作・運営、資金調達、利害関係者との連携調整などの役割を現場において実践し、芸術家、地方公共団体や企業、財団、メディア、NPO、市民との新たな関係構築を目指す。
「キュレーション」：展覧会のテーマやコンセプトの企画立案、それに基づくアーティスト・作品・展示空間の選択、コンセプトを視覚的に伝える演出・運営、カタログ作成等の理論と実践を学習。
「リサーチ」：社会科学的な視点で文献調査及びフィールドワークで芸術と社会の関係を考察する。

■音楽研究科オペラ専攻
2016年度に創設し、グローバルに活躍するオペラ芸術家の個人指導による発音・発声・歌唱表現・演技等「海外一線級アーティストの誘致」

■SGU開始前も一線級アーティストの招へいは行っていたが、SGU開始後は意識的に人材育成プログラムに組み入れ、世界最高峰の芸術系大学・機関から海外一線級アーティストを毎年度継続して招聘し、特別講義、ワークショップ、個人指導、コンサートでの学生との共演等を強力に推進している。

以下は招聘元の例である。
パリ国立高等美術学校/ロンドン芸術大学/シカゴ美術館附属美術大学/パリ国立高等音楽院/英国王立音楽院/ベルリンフィルハーモニー管弦楽団/ニューヨークメトロポリタン・オペラ/南カリフォルニア大学/フランス国立映画学校/ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ

コロナ禍前のデータになるが、例えば音楽分野では、令和元年度は、英国王立音楽院、パリ国立高等音楽院、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団などから 13 名の卓越教員を雇用・海外一流演奏家 29 名を特別招聘教授として招聘し、個人指導・グループレッスンを行った。特にメトロポリタンオペラの言語コーチや欧州劇場で活躍するヴォーカルコーチの招聘ではレチタティーヴォ（独唱方法の一つ）など外国語歌唱の指導も徹底的に行い、 同年10月にオペラ公演を開催する成果を上げた。

海外連携体制の整備

■教員・学生の国際流動性・双方向性の確保や、教育研究の成果を国際的に発信するための場の拡充に向け、本学では主として国際ネットワーク及び連携機関とのパートナーシップを強化した。この取組の一環として令和元年からは元留学生の情報データベース構築に着手した。

■令和４年５月までに世界の２８か国／地域・７８大学／組織と国際交流協定を締結し、双方向の交流活動を推進した。
主な協定校は以下の通り。
ロンドン芸術大学/英国王立音楽院（イギリス）
パリ国立高等美術学校/フランス国立映画学校（FEMIS）（フランス）
リスト音楽院（ハンガリー）　シカゴ美術館附属美術大学（アメリカ）
中央音楽学院（中国）　韓国芸術綜合学校（韓国）
シラパコーン大学（タイ）
ベツァルエル美術デザインアカデミー（イスラエル）

■海外でのプログラム実施は協定校や在外公館等の協力を得て実施しており、コロナ禍前の状況になるが、2018年1月には外務省が設置するジャパンハウス・ロサンゼルス等と共催で「音楽とアニメーションの調べ in L.A. 東京藝大×USC」を開催したほか、6月には、音楽学部器楽科管打楽器専攻学生を中心に組織された東京藝大ウィンドオーケストラが、パリ日本文化会館にて公演を行った。海外でのプログラム実施の際に、積極的に在外公館等への働きかけを行い、パリ日本文化会館については今後も演奏会や展覧会を共同実施することについて合意を得ており、在韓国大使館ともソウル市内の大使館施設の使用の可能性を協議した。

国際共同カリキュラムの開発

■平成27年度以降、美術研究科にてロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校、シカゴ美術館附属美術大学と「グローバルアート国際共同カリキュラム」を実施し、双方の教員・学生により構成されたユニットが日本とパリ／ロンドン／シカゴを行き来しながら、双方で単位化された数カ月間にわたる共同授業・成果発表を毎年度着実に実施している。

■我が国の重要な地域の大学と質保証を伴った連携・学生交流を戦略的に進める「大学の世界展開力強化事業」に積極的に申請し、中東（平成27年度）、中国・韓国、ASEAN諸国（いずれも平成28年度）、アメリカ（平成30年度）、東アジア（令和３年度）の５つのプログラムに採択され、各プログラムの連携大学との相互交流・共同プロジェクトを進めている。

①中東：東洋と西洋文化が交錯融合する中東地域をターゲットにアナドール大学、ミマール・シナン大学（以上トルコ）、ベツァルエル美術大学（イスラエル）と美術分野において本学取手校地の工房群の機能なども生かした実践的なワークショップ等を行った。（令和元年度で補助事業期間終了。）

②中国・韓国：国際アニメーションコース創設に向け、中国伝媒大学、韓国総合芸術学校と日中韓の学生の混成チームが短編アニメーション作品を制作する国際共同演習等の教育プロフラム。

③ASEAN諸国：ミャンマー国立文化芸術大学、バガン漆芸技術大学（以上ミャンマー）、ベトナム国家音楽院、ベトナム美術大学、ホーチミン市美術大学（以上ベトナム）、シラパコーン大学（タイ）、ラオス国立美術学校、カンボジア王立芸術大学と、音楽、美術、映像、アートプロデュースの本学のすべての領域で分野横断も行いながら学生派遣と招へいを積み重ねた文化交流を行っている。ASEAN諸国には文化芸術の担い手を教育するための方法論が確立していない場合もあり、各プロジェクトを通じて本学が創立以来培ってきた実践に基づく芸術教育の手法を各国の芸術系大学に普及する国際貢献的プログラムの意味も持ち合わせている。

④アメリカ：南カリフォルニア大学と共同で、ゲーム技術・表現を駆使して社会的課題を解決するグローバル人材を育成する。

⑤東アジア：キャンパスアジアおよびASEANの後継事業として採択され、中国伝媒大学、韓国総合芸術学校・シラパコーン大学と、短編アニメーション制作プログラムと、オンラインレクチャーを通じた、ASEAN諸国への文化輸出プログラムを含んでいる。

受入にかかる教職員組織

■外国の大学で学位を取得した日本人教員、外国で教育研究歴のある日本人教員について、積極的に採用を進めた結果、外国籍の教員数は増加していないが、全体としては令和３年５月１日の時点で５１％が「外国人教員等（外国での学位取得者・勤務経験者等を含む）」となっている。
■ロンドン芸術大学、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、パリ国立高等音楽院、英国王立音楽院、南カリフォルニア大学、フランス国立映画学校等から各分野のアーティストや研究者を教員として誘致し、多彩な教育プログラムを展開するほか、国外において卓越した業績、極めて高度の専門的学識又は技能を有する者を「卓越教員」として本学において教育研究等に従事する教員として誘致を行った。（その結果、海外大学／機関等との共同プロジェクトに係る参加者数は平成25年201人→平成28年1802人→平成30年2529人→令和2年4695人と増加。）
■招へい教員が長期滞在して本学学生の指導を行えるよう、平成29年度に「招へい外国人教員宿舎施設」を学内に整備した。
■講師以上の上位職専任教員ポストにおいて、外国籍を有する者を採用決定した部局にインセンティブ予算を配分する制度を平成30年度より開始した。

■事務職員を採用する際に国際経験や語学力を重視して選考しているほか、非正規職員の新規募集・雇用にあたって、外国の大学への留学経験、外国での職務経験、日本における外国人受け入れにかかる職務経験を重要な評価項目のひとつとした。
■非正規職員については正規職員へ登用する試験制度を実施し、外国の大学で学位を取得した語学力の高い職員を正規職員に登用した。
■大学全体の国際化を統括する国際企画課については、外国の大学で学位を取得、または外国で職務経験のある者を配置している。
■事務職員全体の国際的なセンス・視野や基礎的な語学力を高めるため、海外研修や語学研修を実施しているほか、ヨーロッパの芸術系大学との間では職員交流に係る助成金が得られる形でエラスムス＋プログラムに係る協定を締結した。
■海外における連携大学との協議や共同プロジェクト、本学と国際交流協定を締結している大学・機関が主催するシンポジウムや式典等に積極的に事務職員を派遣し、国際業務の実務経験を積ませている。
■文部科学省「国際教育交流担当職員長期研修プログラム」の活用を行っている。

■平成２８年度にシラバスの英語化は大学の全科目について完了した。
シラバスはWeb上でも公開し、また、日英併記および100以上の言語に対応した自動翻訳機能を導入しており、今後の継続体制も整備されている。
■平成３０年度から芸術系大学としてふさわしく、わかりやすいシラバスを提供するため、写真や動画の活用を開始した。
■平成２８年度に全ての授業科目へのナンバリングを完遂し、教務システムに反映させ運用している。

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：英国・インド・オーストラリア ）

大学等名	東京芸術大学

⑤事業の評価 【1事業ごとに1ページ以内】

スーパーグローバル大学創成支援事業　令和２年度中間評価結果

大 学 名	東京芸術大学
整理番号	B03
構 想 名	“藝大力”創造イニシアティブ　～オンリーワンのグローバル戦略～

◇スーパーグローバル大学創成支援プログラム委員会における評価

（総括評価） A	これまでの取組を継続することによって、事業目的を達成することが可能と判断される。

（コメント）

グローバル化が急速に進展する今日、国際的な芸術文化交流による国境を越えた相互理解の推進や国際平和の実現などが求められている。本構想は、このような状況の下、我が国の芸術文化を世界に積極的に発信することが重要であるとの認識に基づき、単に世界第一線で活躍できるアーティスト・クリエーター等の芸術家を輩出するだけでなく、芸術文化の承継や国際発信等を担うアーキビスト・キュレーター等のマネジメント人材育成も急務であり、申請大学の「藝大力」を中核に、我が国の芸術文化リソースを総動員し、芸術文化力によって、世界の文化・社会システムや産業構造等国際社会全体を革新しようとするものである。

上記の構想や目標に基づき、大学の特性を活かした取組を積極的に積み重ねており、数多くの国際的なプロジェクトが実施されるなど、本事業の活用により、国際的に互恵的な活動を行い、教職員や学生の意識改革につながる等、国際連携、グローバル人材育成、大学のガバナンス及びマネジメント体制の改革など、成果が挙がっており評価できる。

芸術系大学としてオンリーワンのグローバル化の取組であり、この取組を通じてグローバルに活躍する芸術家や、その活動を支えるアート・マネジメント人材の育成が期待される。

一方、外国語による授業科目の増加やジョイント・ディグリープログラムといった国際共同学位プログラム開設の進捗が計画に比して遅れている。また、学生、職員など全体の外国語能力の向上については、多くの課題が残っている。

大学の世界展開力強化事業なども併せて大学の国際化を積極的に推進してはいるが、事業の自走化に向けてクラウドファンディングなど、他大学がなかなか実現できない工夫を推進していることは高く評価できる。一方で、寄付金を含めて、不確実な財源のみに依存することに対して懸念があるため、本事業の自走化をより確実にするために、更なる財源確保に努める必要がある。

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア ）

大学等名	東京芸術大学

⑤事業の評価 【1事業ごとに1ページ以内】

大学の世界展開力強化事業（平成 30 年度採択）中間評価結果

大 学 名	東京藝術大学
整理番号	AA04
事 業 名	日米ゲームクリエイション共同プログラム － メディア革新時代の新しいアーティスト育成 －

大学の世界展開力強化事業プログラム委員会における評価

総括評価	
A	これまでの取組を継続することによって、事業目的を達成することが可能と判断される。

コメント

本プログラムは、欧米最高峰の芸術教育機関との国際共同カリキュラム構築を掲げた大学の中期目標・計画の推進に大きく貢献する可能性のあるプログラムであり、ゲームクリエイションの分野で世界でも最先端の大学と交流することにより、枠組みが順調に構築されている。交流学生数も当初計画に沿って推移しており、COIL 型教育手法の活用に多く見られる派遣・受入の事前事後学習だけでなく、実質的な共同制作と交流活動としても用いる工夫がなされている。また、外部評価体制の整備がなされ、産学連携の一環として、ゲーム制作会社にメンターの派遣を依頼し、業界最前線の知見を吸収できるようにする体制を構築している点は高く評価できるとともに、本プログラムにおける学生の成果物が学外のコンペティションで入選し、1 作品については企業から商品化の打診を受ける等、社会的な成果の普及も見込まれている。

一方で、単位相互認定については、実施に向けた協議は続けられているものの実施には至っていないが、制度の確立によって多くの学生がプログラム参加に興味を示し、ひいては他大学における同分野への成果普及にも繋げる藝術系大学の先導役としても、不断に推進されることが望まれる。また、事業計画にある国内他大学との連携も進捗状況が明らかになっていない。専門分野での活動実績の充実と一層のノウハウの蓄積、プログラム規模を補完する方策としても国内他大学との連携推進が強く期待されるところであり、全学的な国際共同カリキュラムへの発展を通じて、他大学のモデルを目指しながら成果の普及に務め、国内の他大学との連携に期待したい。

最後に、今後も本プログラム終了後の継続的な実施を見据えた事業計画の策定と安定的な財源確保に努め、学内及び関係機関との質保証を伴う国際教育連携の推進と、将来の我が国の更なる発展に向け積極的なプログラム展開に取り組まれることを期待する。

（大学名： 東京芸術大学 ）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア ）

大学等名	東京芸術大学

⑤事業の評価 【1事業ごとに1ページ以内】

大学の世界展開力強化事業（平成２８年度採択）事後評価結果

大 学 名	東京芸術大学
整理番号	A②-4
事 業 名	国際アニメーションコース創設に向けた日中韓 Co-work カリキュラム

◇大学の世界展開力強化事業プログラム委員会における評価

総括評価	
S	事業計画を上回る成果をあげており、事業目的は十分に実現された。

コメント

本事業は、新時代のアニメ・映画監督を育成することを目的に、国際的にも同分野で評価の高い日本・中国・韓国の国立大学が、国際共同制作を基盤とした共同カリキュラムを構築するものである。

事業展開では、「国際共同演習（通称：Co-Work）」を主なプログラムとして単位化し、3ヶ国の学生の混成チームが一堂に会し、アニメーション制作を行うという特徴的な取組が実施され、5年間で103名の学生が参加、25本の短編アニメーション作品が制作されていることは高く評価できる。国際共同演習は毎年テーマを変えて、「共同企画ステージ」と「共同制作ステージ」の二部構成となっており、ゼロから完成までを対面と COIL 型教育の知見を取り入れたオンラインを駆使して実施し、完成した作品は産業界も巻き込んで開催される完成上映会で公開される。これらの取組は芸術教育のモデルプログラムとして成熟したものとなっていると評価できる。また、3ヶ国に共通する文化・思想背景をテーマとした上で共同制作に関わることで、日中韓の文化の差異と共通性への深い理解へとつながっていることや、PDCA サイクルに基づいた継続的改善、外部評価が実施されていることから、プログラムが適切に実施されていると高く評価できる。更に、交流人数は派遣・受入ともに、目標を大きく上回っており、授業後の学生アンケートの結果からも、養成しようとする人材育成の目標に達していると判断できるとともに、「国際コミュニケーション演習」として単位化し取り組んだ結果、外国語力基準の目標も達成できていることは評価できる。今後の展開としては、韓国芸術総合大学との間で締結されたダブルディグリーに続いて、3大学共同で「国際アニメーションコース」を設置する方向で事業が着実に推進しており、ASEAN 諸国の芸術大学を巻き込んだ取組も既に実施されていることから、今後の事業展開が多いに期待できる。

一方で、学生の外国語力基準は目標を達成できているものの、国際的に活躍する人材を育成するという点からは、更に高い基準を目指す教育内容の構築が求められる。また、デザイン思考や STEAM 教育のモデル構築に向けてより一層深い分析を行うとともに、汎用性のあるツールやデザインを取り入れ、構築した教育モデルを今後芸術系を超えた分野に波及させることを期待したい。

最後に、大学の世界展開力強化事業による補助期間は終了したが、引き続き質保証を伴う発展的な事業展開の実施によって、我が国の大学教育を牽引し、更なるグローバル展開力の強化に寄与されることに期待する。

（大学名： 東京芸術大学 ）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア ）

大学等名	東京芸術大学

⑤事業の評価 【1事業ごとに1ページ以内】

大学の世界展開力強化事業（平成２８年度採択）事後評価結果

大 学 名	東京芸術大学
整理番号	B2
事 業 名	日 ASEAN 芸術文化交流が導く多角的プロモーション ～協働社会実践を通じた心のインフラと質保証フレームの構築～

◇大学の世界展開力強化事業プログラム委員会における評価

総括評価 A	事業計画どおりの成果をあげており、事業目的は実現された。

コメント

本事業は、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム諸国（CLMV）ならびにタイを代表する８つの国立芸術大学と連携することで、高等教育機関における芸術教育プログラムを充実させるとともに、教育研究に関わる質保証システムを構築し、グローバルに活躍できる芸術系人材を育成することを目的としている。

事業展開では、連携大学における新コースの開設やダブルディグリープログラムのための協定締結、学内での「東京藝大アジア・アートイニシアティブ」の設立、コロナ禍の対応として、オンライン・プラットフォーム「TMOP（Tokyo University of the Arts≠Mekong Online Platform)」を開設した点は評価できる。特に、教職員と学生のユニットを構成し双方の伝統的・現代的技術文化を学び合う共同授業を実施したこと、また、連携機関の所在する都市・地域コミュニティを巻き込んだ協働社会実践（アートプロジェクト）を中核に据えつつ、交換留学等の学生交流の整備・促進や連携機関の若手教員の交流といった事業を行ったことを評価したい。

一方で、派遣・受入の多くが３ヶ月未満の短期（ユニット派遣・受入を含む）であったことや、派遣・受入国に偏りが見られたことは課題である。中長期にわたる派遣・受入の促進や、派遣・受入国の拡充に関して、目標達成に至らなかった理由を分析する等、改善に向けたより積極的な対応が必要である。また、コロナ禍で実施したオンライン交流への参加者が計画よりも少ない結果となったことを鑑み、オンラインで実施する交流プログラムの募集方法やプログラム内容に関して分析し、その結果を今後のプログラム展開に活かすべく対応が望まれる。

最後に、大学の世界展開力強化事業による補助期間は終了したが、引き続き質保証を伴う発展的な事業展開の実施によって、我が国の大学教育を牽引し、更なるグローバル展開力の強化に寄与されることに期待する。

大学等名	東京芸術大学

⑥他の公的資金との重複状況　【2ページ以内】

◆スーパーグローバル大学創成支援事業
採択事業名：「“藝大力”創造イニシアティブ　オンリーワンのグローバル戦略」
事業概要：我が国唯一の国立総合芸術大学として、アジアでは確固たる地位を築いている藝大が、世界的にも稀少な、美術、音楽及び映像３分野を有する総合芸術大学の強み・特色を活かした戦略を総力を結集して展開し、海外一線級アーティストユニット誘致等によりグローバル人材育成機能強化を図るとともに、ブランディング戦略を推進して国際プレゼンスを明確化することで世界ブランド“藝大”への飛躍を目指す。

　同事業は大学組織の国際化を推進する為の体制整備、欧米を中心とした世界有数の芸術系大学とのネットワーク基盤の構築および同基盤に基づく海外一線級アーティストユニットの誘致等を中核としたものであり、経費の重複は一切ない（同事業において構築している体制・システム等については、当然本申請事業でも活用されることになるが、当該体制・システムに係る経費については、本申請においては一切計上していない）。

◆平成30年度大学の世界展開力強化事業（COIL型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援）
採択事業名：日米ゲームクリエイション共同プログラム－メディア革新時代の新しいアーティスト育成－
事業概要：多様な映像表現を有機的に組み合わせたゲームを「現代における総合芸術」と捉え、わが国唯一の国立総合芸術系大学として培ってきた世界最高水準の芸術表現をゲーム分野で昇華し活躍する、新時代のアーティスト育成に取り組むべく、国内外の大学・産業界との連携のもと、ゲーム教育のカリキュラム開発、新専攻設置を目指す。

同事業における交流プログラムはアメリカの南カリフォルニア大学を対象としたものであり、本申請に係る交流プログラムとは明確に異なり、経費の重複は一切ない。

◆令和3年度大学の世界展開力強化事業（アジア高等教育共同体（仮称）形成促進）
採択事業名：日中韓＋ASEANの文化・経済圏発展に向けた、アニメーション教育・研究のための共創プラットフォーム構築
事業概要：アニメーション教育・研究の共同プラットフォームの構築を通じて、将来のアジアのアニメーション文化・産業を担う人材を育成し、新たな表現や技術を開発し、アニメーションを中心としたアジア文化・経済圏の更な
る発展に貢献することを目指す。

同事業における交流プログラムは中国・韓国・タイの大学を対象としたものであり、本申請に係る交流プログラムとは明確に異なり、経費の重複は一切ない。

◆（独）日本学生支援機構　2022年度海外留学支援制度（協定派遣）
　採択事業名
　　①「フランスの著名アニメーション教育機関派遣プログラム」
　　②「フランスのアニメーション高等教育機関での作品上映を通じた教育カリキュラム」

同事業における交流プログラムはフランスとの交流を対象としたものであり、本申請に係る交流プログラムとは明確に異なり、経費の重複は一切ない。

（大学名：　東京芸術大学　）（主な交流先：英国・インド・オーストラリア ）